１９２５年（大正14年）〔21歳〕
「辰雄日誌１９２５」No. 8　（1）
――１９２５年９月１～30日――

小池辰雄

「もし神の光のうちに在（いま）すごとく光のうちを歩まば、我ら互に交際を得、また其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔む。」（ヨハネ第一書１・７）〔独語〕

○１９２５年９月１日（火）

晴。大震災第３周年（実は２年目のことを何んだって３周年と云う）。

大震災当日、職に殉ぜられせたる吾妻正剛様の為に謹みて哀悼追懐し奉る。正勝様もお気の毒であった。午前11時58分黙祷。山上祈りの場所にて（富士、函嶺、伊豆連山、太平洋、小田原国府津、一眸（いちぼう）の中にあり）。すべて殉難の霊の為、また知られざる基督者のために。

独逸、英語の勉強に全力を注ぐべし。最後の半年に見事な結晶体を作れ。僕の今日までの生涯にて最も多忙なるべき半年が愈々到来した。試練の善き日々よ来れ！　信仰に依りて貫くことあらんのみ！　渓流のせせらぎ、水車の音を聞きつつ。……〔独文省略〕……。

午後、水泳。３時、さつまいも。小さい人々と遊ぶ。夜、明月。楼上のながめ、言わん方なし。今夜ほど空気清澄な晩はなかった。秋立つ。虫の音、十四日の月。

母、兄、姉、親戚、知人、また僕自身さえ知らざる者に僕はなるであろう。知らざることをなすであろう。我が父なる神様のみ知り給い示し給う。すべての人言、それ何ものぞ。神の御言のみ我は畏る。我は「神の子」たらんのみ。願わくは、この確信を以て全生涯を貫かし給え。貴き主の御名よりて。アーメン。

○１９２５年９月２日（水）

晴。人の偉とするところ必ずしも偉ならず。神のよしとなし給うことが僕の最もなしたいことである。然らずんばすべては空である。

空から昨日、僧がビラを播いて追悼の宣伝をしたとのこと。なさけない東京市民、奇をこのむ僧。すべてのこの世の力は彼等を善に導くに足らず。我は益々信仰を強くされるのみ。世の流れはいよいよ僕に感じて来る。僕はいよいよさからう。新聞の言、人の言、すべて否（ノー）を以て応えることのみ。ラジオとかいうもの、享楽浅薄の事には利用されるのにもって来いの文明機械。知人某はそなえんと考えているそうである。彼もあわれな人間。僕は峻厳、辛辣の語を吐くかも知れない。しかしやむを得ない。苦（ニク）まれてもしかたがない。真理のために戦うのであるから。こんな別世界の閑静な地に居て而もこんなことを思うて、人のた

めに怒り、憂うる。人間社会に出てはどんなに思わせられることであろう。僕の力はこれに耐えぬ。彼の力のみ之に耐う。御恵み深き愛よ、願わくは愛の力をはたらかしめ給え。アーメン

午前10時、斎藤さんの皆さんと浜へ行く。泳げば泳げないこともなかったがやめて、ただ遊んで居た、小さい人々のお仲間入りで。お昼を浜で停車場のお弁当ですませる。小田原で買って来たこの間の羊羹が美味かった。帰る。1時半、午睡。荒れ模様である。

さて、去年の7月から薬を用いざることⅠヶ年になった。１９２２年夏から２４年夏まで満２年間、如何に薬をのんだことだろう。仁丹、タカジアスターゼ、ビオフェルミン、ラクトスターゼ、ブルトーゼ、薬用葡萄酒、人参葡萄酒、南先生の薬、やれ、印の何のかのと、あの頃のことを思うとなさけなくなるほどである。身体の弱かったこともあろうが、信仰が本当でなかった。実行の力にあらわれなかった。それでもなお信仰はあずかって力があった。僕があの病気中にあって信仰の火に時々烈しく燃やされることがなかったら、どんなにみじめであったろう。炎々と燃え上る信仰の火は次第に僕を強くして来た。何としても１９２３年の春はわすれられない。それを思うと、薬の浪費も恥ずべきことであったが、感謝することは更に大である。

〔註：1925/9/6 日記に、「休学中、１９２３年の正月から春にかけ、内村先生の御講演を大手町にうかがったこと、及び著書を拝読したこと。これが基礎となってやがて動かざるものへと導かれて来たのである」とある〕

今や僕は、信仰によりて強し、と云うことをやや言うを得る様な気がする。勿論、人に対してでない。自分自身に対して私(ひそ)かにである。信仰によらずば僕は無しである。

"Only with the wings of the faith I can soar."

〔ただ信仰の翼をもってのみ私は天高く飛び得る〕

である。誰かが言ったかも知れないが、これは僕の声である。

夕方、飛行機の飛ぶを見る。露機来れるかと思って上山している。来らず。飛行機の訪問の交換で国と国とが親密になるか。一時的の交歓、これ破るるは当然。国と国とはその国民の心と心とが一致せざれば親しくならず。国民と国民は利害関係の一致に於て提携するが普通である。心と心との一致はそれ一つの神を仰ぐにあらざれば来らず。真の平和の来ること難き哉。キリストの愛の外、もとと云うもとはない。

僕は、小さきながら、浅きながら、次第々々に経験によってこの事のたしかなるを益々強くされるのみである。有難き限りである。キリストの愛を知ることは人の智の最大である。キリストの愛によって生きることのみが正である。アーメン。

満月が東の松の枝に上って来た。時に9時である。今日は最後の半年の第2日である。よく泳いだ、よく運動した、よく食べた、よく眠った、よく勉強した。しかし更によく、尚最もよくと云うところへ驀進(ばくしん)しなければならぬ。

○1925年9月3日（木）

雨。

Velis remisque contendere!

Fegefeuer (Purgatorium) 12. G. 4-6〔煉獄篇12歌〕

汝の道は長かりき、迂遠なりき。然れども之、迂遠に非ざるを今にして知る。僕は罪を犯した。何度も何度も犯した。もう救われそうもないほど犯した。しかも僕は行為に依らなかった。行為をあらためんとしなかった。あくまで信仰の弱きをなげき、信仰を燃やさんとした。祈った、泣いた、考えた、嘆いた。信仰を与えたまえとキリストを仰いだ。そして彼は来り給いて僕は力づけられた。信仰の熾烈な瞬間に僕は全く善であった。行為は問題でなく善であった。信仰の火がおとろえると再び罪を知った。悪をくりかえした。そして僕は行為をさほどかえりみなかった。否、全然かえりみないと云ってもよかった。信仰へ！と僕は仰いだ。行為なき信仰は徒しくあったかも知れぬ。しかし信仰が強くなるにしたがって、真になるにしたがって、行為は伴って来た。強く善におもむいて来た。力が出てきた。明白となって来た。修養家、道徳家の一般の人が見たら、僕は誠にあわれな変物であろう。内なる心と外なる行為との反せる奇怪なるものであろう。しかし僕は彼等の行為につとめる道、更に僕をして云わしむれば、不徹底な道、真に善に非ざる道、形の道をとらなかった。所謂いい人、おとなしい人、品行の人たることは、僕は望まなかった。また僕が真剣なるときに僕はかかる人となることをきらった。

僕は飽くまでも信仰を本として起たんとしている。今僕が行為に善なる人であるかどうかは知らない。おそらく多くの欠点を有する人であるにちがいない。しかし僕はそれでよい。僕は信仰に強くなりたい。それがやがて強き強き善を産む基であるからである。僕は曖昧をきらう人となった。計（ハカリゴト）をきらう人である。すべて根本の善に立ち入りたいのである。形の善は虚である。僕はこの外に正なる道、義なる道、善なる道を知らない。

ルッターの言った道は之であると信ずる。かつて正に強しと思いし人はやがてその破れるを知るであろう。僕の道に於ては真の勝利の外なにものもなきを今から確信し、預言し得るのである。己れの罪なること、己れの弱きことを知らざるものは強くされないのである。之は僕の信仰告白である。

僕は今、雨中散歩をなし、独り全く独り海岸に出で、大海を望み、沈黙のウネリを寄せて、汀に大波を轟かすその大海を望みて、絶大なる力に打たれたのであった。それが僕の信仰の力と暗合したのであった。僕の眼界は汀と轟く大波と大海と水天髣髴たるかなたと天とのみであった。すべての山も半島も雨中に蔽われて見えなかった。天と水とが僕の友であった。僕は叫んだ、

「主は臨り給えり。主は再び臨り給う」

と。そして僕は祈った。そして僕は讃美した。

Ich habe an die Macht der Liebe, die sich in Jesu offenbart, ins Meer der Liebe mich versunken!

〔私はイエスの中に現われた愛の力によってその愛の海の中へ沈んでしまった！〕

を五度高唱した。僕はこんな歓喜に溢れて自然に対したことは初めてであったろう。

夜、碁石まわしをして愉快に8人であそぶ。僕の送別であるとのこと。母上から「帰れ」とのお音信である。今日帰ればかえれないことはなかったが、雨が降って居たのと、斎藤さんの甘いお言にひかれて一日延ばさせて戴いたわけである。明日は3時21分の汽車で帰るべく車にたのんで来た。

随分御馳走にもなり、愉快に暮らした。斎藤さん御両人位、サッパリした親切な方も珍しいかと思う。とにかく親類よりも気楽である様である。妙な考がないから本当にいい。僕は親類の妙な考が（敢えて言わぬ）本当にいやだ。国府津の14日（2週間）も本当に感謝であった。沼津と国府津、忘れられぬ。斎藤さんと一緒に帰ろうと思っていたが一足おさきというわけになった。9時のお祈りは多く感謝することありて10分間を要した。それでは今晩は寝る。願わくは神よ、周囲の人々にお恵みあらしめ給え。アーメン。

○1925年9月4日（金）

雨。少し読書。支度をする。11時に出来上がる。雨は已まない。2時10分前、車屋が来た。気をきかせて小田原発の汽車では如何と言う。僕はそれに気がつかなかったので、それは空いていてよいだろうと云うわけで直ちにお暇（いとま）することにした。斎藤さんは便所に入って居られた。「有難うございました、サヨナラ！」と云って出た。門まで送って下さった、叔母様と小さい人々が。2時27分国府津発。車屋には要求より少し余計にやってその気のきいた親切に謝した。3時20分のので立とうとしたのであった。故に約1時間早く帰れたわけである。車中、眠りと読書。帰京。なお細雨あり。しかし車中は涼しくあった。

夕食後、神楽坂に写真をたのみに行く。井本さんに寄る。約1時間語（ハナ）す。皆元気。『宗教と科学』第2輯を買う。

○1925年9月5日（土）

晴。朝荷物着。泰ちゃん来る。整理に時間がかかる。母上未だお粥。お床も全然離れ得ず。おやせになっている。よき秋の来らんことを祈る。

お清（キヨ）さん来らる。石井さんに伴ってこの10月20日出帆でアルゼンチンに行かれるとのこと。「おめでとうございます」である。好機に臨みて、すべからく逸（いつ）すべからずである。天産国、アルゼンチン、別世界。それは大いに行くべしである。二度とこんなことはないであろう。お清さんも随分今まで苦労のこともあったろうから、よいことが恵まれたのだと思う。感謝して行かるべしと思う。お清さんにお恵あれかし。

兄帰らる。千葉の砲兵学校見学から。飛行機にも乗られた。立川で。夕食後、青木へ行く。喬（たかし）さん、尺八の練習。実さんお留守。四郎ちゃん水泳でお留守。泰ちゃんには帰りに古本屋で会う。副業をしていた。白山まで見送ってくれた。アイスクリームをおごった。暮までのおわかれである。泰ちゃん、ハキハキして来て本当によい。近頃、僕に大層感謝の面持である。人には親切にすべきである。真心から。また僕のかねてからの泰ちゃんの性格に対するお祈りの聴かれつつあるを感じて本当に嬉しく感謝である。

神よ、人のよくなるのを見て心から感謝することの出来る信仰を与えられたことを感謝し奉ります。今までにこれほど人のために嬉しく思ったことはほとんどなかったかも知れません。益々導き給え。アーメン。

青木の叔母様、お太りである。お酒でごきげんである。淳吉様、お容態ただならざるとの御事。その同情のお言葉に曰く、「淳吉様もお気の毒であるけれども、川上のおばさまがおかわいそうだ」と。それはそうかも知れぬ。しかし死に向かう病人への同情はこんな言葉で云えるのかしら。僕にはどうしてもそんなことは云えない。

淳吉様が本当にお気の毒である。淳吉さんは高校入学以来、病のために殆ど苦しまれ、遂に今日肺に及ぶ。その間の苦、本当に可哀そうである。彼に信仰なきが故に可愛そうである。お気の毒である。今、信仰をもたれよと云っても、それは無理であろう。病人の精神は全く弱って居られるらしい。淳吉さんよ、光明をその暗中よりのぞまれないか。健康の人の知らざる光明をのぞまれないか。僕はこのことのために苦しみて祈る。本当に胸が一杯になる。僕には言葉がない。お祈りしかない。ああ、淳吉さん、願わくは、光りかがやく天国を待ちのぞまれよ。信ずればそれでよろしいのである。キリストはかの罪人さえ天国へ入れ給うた。願わくは淳吉さん、若し逝く日が来たならば、その時は普通の人の嘆声を以てせず、歓喜を以て御両親を真に歓ばせ給え。僕はこのことのために毎日お祈りします。苦しくも病床に居らるる淳吉さん、願わくは僕のこの声を神様から聴いて下さい。

○1925年9月6日（日）

晴。聖日。藤井先生訪問。丁度10時半着。今日もお集まりはなかった。先生とのおはなしのみであった。

1．読書に関することをうかがった。

「須らく第一等の書を読むべきこと。第一等の書を熟読すべきこと」

である。世には無数の書あり。しかして吾人の精力に限りあり。それよりも更に大切な理由として良書によりて生くるが大切なことである。この貴き生命を悪書によりて失うは実に之、神への不信の極みである。

2．藤井先生は、

「高等学校、大学時代は我々一生の最大重要期である。この期を逸する勿れ」

と懇々と言われた。この期にあたりて芽を育てざれば大抵は駄目。聖書、ダンテ、ミルトン、カント、等の第一等の書を熟読すること。

全く感謝して、確乎たる決心をなすべく強められて帰った。先生は37、38のお年輩で「ダンテが（神曲のこと）本当に自分の書の様な気がする」と云われる。かくして本当によくわかったのである。先生はこれからカントに入らんとして居られる。一生かくして貴き書を熟読、体験されるのである。そしてその準備は高校、大学中になさるべきであると。先生は岩本先生と云う一高の独逸語の先生に一高時代に教授を受け、非常に厳しく教授され、苦しい勉強をされたそうである。そのために独乙語もお出来になるのである（自分では勿論そうは云われぬが）。

苦しまなければ駄目である。これは明白な事実である。僕も苦しまねばならない。決して語学は一朝一夕には成らぬ。コツコツと築き上げねばならぬ。毎日苦しんで読まねばならぬ。

幸にしてこんどの三弦さんのお家は学校から徒歩30分の所であるから、往復1時間のよい運動である。その外はもう運動は要らぬ。体操の時間で十分。とかくのろまな僕は大いにヘビーをかけて勉強する。それも所謂受験勉強でなしに、思想をよんで行く勉強をしよう。藤井先生と云う最良の先生が僕には居られる。僕はそれに従う。何しろこの秋は猛烈である。生まれて初めてのスゴミをあらわしてやろう。今日も『ルッター研究』誌第5号を一読したが、それに、ルッターは21才になって初めてその天才を発揮しはじめて益々、振るったと云うことである。僕は勿論凡才であるが、僕の凡才でもその眼が開けて来たからには所謂凡は抜けたいものである。故にガンバル。猛烈にやる。雄々しく戦わん。

夜、宣ちゃん来る。愉快に話したが、すこし聖日の夜をジャマされてかくの如くおそくなったのは、残念と云えば云えることかも知れない。宣ちゃん、なにを見たい、かにを聴きたいと云う。快楽?を要(もと)めているかなんだかしらないが、僕には問題でない。見たければ見るがよい。現代人は皆そうであるから。僕はそれと大いにチガウ人間デアル。

晩は、兄上の御誕生日が明日と云うので今日に繰り上げ、ウナギの御馳走になった。兄上、俸給100円になられたとのこと。これまた勤勉の結果である事からお目出度くある。貴き15円の増俸である。貧しきものにこの貴さがある。お金も人の心によって貴いのである。ありあまるほどある人は、やれ、庭に何百円とか、やれ門に何百円とかいって虚飾だか、外貌だかに勿体ない金を投ずる。お金の使い方を真に知るものは貧しき者にあり。知らざるものは富者にある。貧者、偶(たま)々富みて金の使用を忘るれば之またその美なれど、貧にも富にもよく知るものは本当に少ないかも知れぬ。

偽基督者、虚なる空なる基督者、あるを目撃して不愉快である。教会通い不浄分子である。あんな奴が居るから世の人に、一般の真面目な人にさえ基督教はわからなくなるのである。誤解されるのである。罪の大方は現今の基督者、ことに教会信者にあるのである。基督者は、

「アーメン」と云ったり、「声音をつかう様の祈りをなしたり、讃美歌を歌ったり、謙遜柔和をよそおうたり、言葉を丁寧にしたり」する宗教。ああこんなものであろうか。そんなものを宗教と云い得るか。基督教は然らず。基督教は実は真面目な厳格なものである。世の倫理道徳をこのみ、修養に志す人のそれ以上に、真面目と厳格を要する宗教である。このことを知らないで、基督教の何たるかはわからぬ。基督教はその根本の心に逆らって問う、「汝の心、善なるか」と。

それはただ信仰の有無によって分かれる。信仰なきところに善なく、愛はないのである。故に、「汝に信仰ありや」と。神の愛を信じ、即ちキリストを信じ、而して、真の愛が生まれて来る――それは神から与えられる――のである。

藤井先生はまた、北京の兄の手紙を出されて僕に示された。その最後の節は、

「高等学校が大学になり、大学が世の中に出、僕みたいに北京辺へまで出て来るようになりました頃、次のジェネレーションの一人として弟等がお導きにあずかれたら、許されざる想像を逞(たくま)しう致します。12時半になりました。東京は1時半で御座います。静けきお寝りをお祈りいたします。１９２１年1月16日、政美。藤井先生」

僕の18才、受験準備中の頃である。これによると兄上は、僕達が、ことに僕が大学卒業の頃、お導きにあずかることが出来たら上々で、なかなかむずかしいことで、殆ど不可能のことを想像しつつも、強き苦しき祈りを僕のために捧げて居てくださったのであった。僕は之を拝見して涙が一杯であった。

藤井先生は言われた、

「天にて兄さんはキット感謝の祈りを捧げてどんなによろこんで居られることでしょう」

と。僕は答うることさえ出来なかった。然り、このことは召されし高島の伯母様も言って下さった。そして伯母様も本当によろこんで下さった。僕はまた感謝に溢れて帰った。お子様方が可愛い声で「サヨナラ」と云われた。

聖日の午前は此くの如くあった。10時半から11時10分までお邪魔した。先生は何か書いて居られた。次の聖日13日に水戸からお礼を書こう。

兄上が祈られた以上に祈りは聴かれた。高校第２年の年、１年の第２回目の年から僕は信仰の道にともかくも入ったのであった。

1．兄上が召されてこそかくなったのではなかったかしら。なさけなきこの罪人！

2．病気のどん底から光明をかすかながらも認め初めた。１９２２年の夏のこと。

3．休学中、１９２３年の正月から春にかけ、内村先生の御講演を大手町にうかがったこと、及び著書を拝読したこと。これが基礎となってやがて動かざるものへと導かれて来たのである。

病中、僕はまだ死ぬべき人でないと云うことがハッキリ信じられたのは、不思議と云え

ば不思議であった。神様なるものをハッキリ認めては居なかったのであるが、何となく、あるものが僕にかく強く信ぜしめる様な気がした。それが7月11日頃のことであった。病中のどん底である。

それには僕は小さいときから運のよい人だとよく云われ、自分もそう思って居た妙な感じもたすけていたかも知れない。また一つには兄上がさきに逝かれ、また僕もということはどうも思われず、

「僕は大きい兄さんのあとに残されたのである」

と云う様な感じもあったようである。大きい兄さん、と云う語は僕に一種特別の感じあたえる。そこに威厳がある。厳格味をふくむ。と同時に、非常な懐かしみ、愛がひびいてくる。「辰雄！」と大きな声でどなるのもきこえてくるし、本当に気持のいい笑いで僕に対し、僕をいたわってくださる兄さんが浮かんで来る。

兄上よ（オオキイニイサン）！　まことにありがとうございます。僕はこんな有難いことはありません。もう今晩はこれ以上何にも云えません。兄上の日記を拝見して本当に今日もなお僕の傍に居て話してくださる心地がいたします。どうか、いつまでも、そして、その日来るまで僕と話し、僕を叱り、僕を励まし、僕をなぐさめてください。その日来らば聖国にのぼりて主の御許で親しくお会い致しましょう。兄上の苦しきお祈りに今日お応えすることを得ましたのを深く感謝し奉ります。兄上も感謝して下さい。感謝しよろこんで居られる兄上を明（タシ）かに信じます。されど僕は未だ未だのものでありますから、どうか、これからの聖戦に雄々しく戦わんため祈って下さい。一生を戦わんためにどうか。

神よ、有難きこの夜、多くの深謝のこと、黙祷の中に。アーメン。12時10分前。

○1925年9月7日（月）

龍二兄上の御誕生日、満27才。昨日は午後、兵隊さんの大工さんが来て、家の設計を盛んに兄上と議して居た。僕も時々口をはさんだ。いよいよ着手となった。西荻窪の郊外の地、井ノ頭公園を西方にのぞむところ、武蔵野の原、富士をもまた遠望す。100坪のところに30坪の小屋、二階の家。よきホームが静けき地に結ばれんことを切に祈り奉る。母上様の御健康にもよいところ。僕達の勉強、祈り、思索には本当によいところ。有難きことである。本当によくなされんことを祈る。

さて僕に於てはこれから一秋一冬の大勉強である。これは何より大切なことである。プランのもとに確実にやる。断乎たる決心である。文科か法科か、それはこの暮に神様が定めて下さると信じまつる。クリスマスの頃、僕はよき聖告を受けることと信ずる。それまでは毎日の義務、計画を確実に断行することあるのみである。本当に猛烈である。エルンステステ〔最も真剣〕な事である。大学入学試験になんか破れたたら、タチンボ〔日雇い労働者〕にでもなれである。

朝は6時半に起きる。水をあびる。独乙語の聖書を読む。
ひるやすみはノートの整理でもやる。眠ってもよい。
4時から夕飯までに、学校のことをやっつけてしまう。英語もこの中に。
7時から9時まで、ドイツ語をやる。
9時、お祈り。
10時まで、旧約聖書と宗教書。
10時半まで、日記と書翰。（書翰のある日は日記は書けないかも知れぬ。あるいはつけてしまうかも知れぬ。否、毎日日記はつける習慣だから、つけないわけに行くまい。とにかく遅くても11時までに就床）
10時半就床（おそくも11時まで）。
断行する。それでなければ死ね、である。冗談でない。真剣である。
Abraham Lincoln〔アブラハム・リンカン〕が額の中から見おろしている。My Brother M.〔政美兄上〕が右の方から、独り筆をはしらす僕を見て居られる、同じく額の中から。僕もかかる人になりたいばかりである。
リンカンも十字架を負うて、兄も十字架を負うて、僕も十字架を負つつ、「彼」に従いたいばかりである。
昨年の夏は木星はScorpio〔さそり座〕に宿っていたのに、今年はSagittarius〔いて座〕に移っている。ここに明らかに天体の美わしき移動を見る。
午前、武田へ所用ありて。叔母様は寝て居いでになる。どうも、およろしいと云うところへ行かない。叔母様の御健康は、本当に全治するのはいつであるかわからない。叔母様は己れの不節制でかくなられたのでない。叔母様は人のため、ことに叔父様のためにつくされた由（ユエ）にかくなられたのである。病身の叔母様、真の健康と云うものを本当にあじわってごらんになりたいであろう。しかし叔母様は、とかくとこぼす様なことは言われない。満足で居られる。叔母様の御心がいかに安じて居られるかは知らないけれども、普通の人とはちがうことはたしかである。母上と云い、高島の伯母様と云い、武田の叔母様と云い、平口様と云い、すべて不完全な御健康でありながら、よく歩んで居られる。その中、高島の伯母様はすでに信仰の篤き道を歩まれて天に上り給うた。武田の叔母様はクリスチャンであるかどうかはよく知らないけれども、キリストの喜び給う婦人であることはたしかである。故に、天国に必ず召される御一人と思う。お陶宮を宗教とは思って居られないであろう。叔母様が信仰の自由を得られると本当に感謝するのであるが、それもそれも或いはかないかねるのではないかと甚だ残念に思う。ただ僕はお手紙によって叔母様とお話しする。叔母様の御心が本当にその奥に於て、神様に向かって泣き、感謝してくだされば、もうそれでよい。基督教教義の如きは要らない。
興行銀行（150円引出し）、三菱銀行（武田）（390円引出し）へ行く。現金770円（武田）。（計500円

を武田の叔母様からおかりした）。即ち、650円を安田支店（神楽坂）に預けた。

『ケーベル先生小品集』を丸善で買う。『宗教と科学』『旧約と新約』『ルッター研究』はすでに来た。第一等の書を読むべしをうかがって安心した。やたらに本屋なんか新刊をあさるのは馬鹿。家の中に求めよ、兄は多くのこして行かれた。「クラレックス」がよい。

地球堂でベートーベンの顔をつくづくながめて、否、凝視して、偉大、深刻、厳粛、純真を発見して、限りなく動かされた。偉人の顔、ことに眼光はちがう。何だかベートーベンは僕の懐かわしげな人である。その顔は、人は多く恐れるであろうが。

第一期は25まで、第二期は30才まで、大切な大切な準備時代である。

「読書のときも、対人のときも、真剣と愛とを以て」。今日はつくづくこれを感じた。

一日読書せざるは学生、否、僕に於ては一生を通じて言い得ることであるが、大怠慢、罪悪である。

『運動競技全書』内務省編輯を斎藤叔父様に戴く。去年は、『皇太子殿下御外遊記』をいただいた。よき記念になる。有難い。

3時頃、斎藤様が西瓜を食べにこいと仰ってくださる。丁度帰宅したとき、渇していたので実にうまかった。働けばいいことがあると思った。

武田の叔母様は僕に大層礼をのべられた。また僕の上京の来春をまって居られる。僕はそれにお応え出来る人間になりたい。

大きい兄さんは僕のために道を開拓されたのである。僕は示された最善のこの道を歩む責を有す。僕は絶対に之をはなれ得ぬ。僕は宗教科へ行くか、独文科へ行くか知らない。しかし僕はたしかに極少数の選ばれた人の一人であることをおそれながら知る。神様が此くされたのである。僕のキャリーアを顧みて、今日に及ぶとき実に実におどろかざるを得ない。かかる生命の道まで！　これは、僕の決して偶然のことでなく、神様の深き聖旨である。僕は必ず神様の御用、とくに霊に関することの御用をしなければならないのである。僕は天才の頭脳を有しないけれども、勤勉、努力によって必ず何ごとかをなし得る能力は授けられている。これを費（ツカ）わなかったら最大の罪である。かく考え、否、かく信ずると僕は如何に責の大なるかを切に感ずる。この身体を自分のためと云うことは一つもないのである。この身体は神のためである。人のためである。

神様、親しく聖手を以て導き給え。切に。アーメン。

十字架を翳（かざ）す信仰の勇士よ、起て！

父なる神よ、聖声に平伏して。然り！　アーメン！　午後12時9分。

○1925年9月8日（火）

晴。午前、勉強。午後、柳沢様に地面を借りるについてその登記のことをおねがいに行く。奥様六人目のお産のおすみになったところ。お目出度くある。それから武田へ行く。製菓

会社へ行く。叔母様とお話しをする。信仰のことにすこし及ぶ。叔母様とは本当に心を打ち開けてのお話しが出来る。夜、斎藤様の叔母様、レン子様、急にお腹をわるくなさったのでお見舞した。四郎ちゃんが来て長くはなして帰った。金森君にも会った。感謝なりしことあり。今日は疲れたから筆を擱く。いよいよ明日、水戸行である。

○1925年9月9日（水）

晴、すずし。午前7時に起床、直ちに支度。9時支度完了。朝食をしたたむ。斎藤さんの叔母様、レン子さん、お腹をわるくされたのでお見舞に参上。お暇（いとま）、母上に送られて、水戸に立つ。バスケットと鞄に本をギッシリ、風呂敷づつみ一つ。なかなか重くある。上野駅に10時10分に着く。第一線に立つ。最初の被改札者、10時55分発。車中読書。涼しかったがアイスクリームを我孫子、土浦で食べた。

新しいキレイな家に着いた。僕の室もいい室、勉強もよく出来る事だろう。とにかく前の家でないことは有難い。三弦さん、千鶴代さんお達者。隆ちゃんはわけて元気。今日は三弦さんのお誕生日。夕餐は御馳走であった。随分いただいた。みやこ湯に入った。整頓が出来た。いよいよ明日からプランのもとに始める。こんな愉快なことはない。今日もくたびれた。これでねる。10時半。すべて我が祈る人々にお恵みたれさせ給え。アーメン。

○1925年9月10日（木）

雨。秋近し。ここから学校まで30分を要す。一直線な単調な道である。誰も居ない。明日からと云うこと。南与之が来る。二人で散歩をする。公園の方へ行く。色々話す。彼はこの夏2週間ほど小学生を教えたそうである。面白いことをやったものだと思った。彼は別に宗教の心もない様である。思想は豊かな様である。僕の眼からは「大なる欠陥が！」と見えた。僕は一つ本当に宗教とはかくの如きものであると云うことをあかしを以て彼等に示してやろう。今からである。そして一生涯これがためである。それはなかなかむずかしくもあるし、彼等にもなかなかわからないものでもある。僕は思想は豊かでなく、言辞を知らなく、所謂常識はなく、一般の学者たらんとするものの僕のなかまからは或いは馬鹿にされそうかも知れない。しかし僕に対しては、根底に厳として動かざる最大のものがある故に、彼等のすべての美辞、奇説の如き何もおそるるに足らぬのである。かえってその空なるがかわいそうである。

僕はあくまで聖書、つきざる源泉から永生を汲み出す。ダンテもミルトンも偉大なる詩人と云う詩人、預言者と云う預言者、みなもとは皆、この一聖書より出づ。偉大なる書として聖書の如きは絶無である。これは読んでわからない。教科書によってわからない。これは、直接の神との交流、体験によってわかる。しかして読むとき、つきざるその生命を汲みとるのである。

さて、僕の学友に一人もなし、真に聖書を読み得る人は。そしてまた第一、聖書を読んでいるものも恐らくないであろう。かくては彼等が何を云おうと、けだし空である。現代日本文士によって書かれたるものを読むものの禍なる哉。即ち、現代日本人の知識階級なるものの禍なるかな。

この時にあたって、極々少数の人々が真に、真理のために立たんとしまた立っている。道は非常にけわしい。しかし主は助け給う。この淋しき困難な道を行くのが僕の使命である。かく選ばれたる僕は凡人と行動を共にするをゆるされぬ。僕は勉強をしなければならぬ。勿論深き内的生活の日々の中に。30までは準備である。

己れ、現われんとするもの、高しとするものは、現われず、高くせられざること明らかなり。藤井先生の『旧約と新約』63拝読。「キリスト降誕の研究」（9月号）である。「羔の婚姻」第30歌は実に歓喜、讃美なることよ。藤井先生のお言葉、

「第一等の書を反復熟読なさい」

とは、聖書、ダンテ、ミルトンの如き書をさして。

「高等学校、大学時代は一生の最も貴いとき、これを無駄に過ごしたら、もうその人はよほど特別なことがあらざる限り駄目である」

と。僕の現在の如何に貴き時期であるかを強く示され励まされた。この二つのことを心に銘して毎日を送らねば駄目である。有難き誡め忠言とてかかる如きはない。どんな教師がこんなことを言ってくれたか。修身、倫理の何時間よりも藤井先生のお室の1時間は貴くある。ことにお祈りに至りては実に我を忘れて従いたきものである。

内村先生とか、藤井先生とか、畔上先生とか、佐藤繁彦先生とかいう偉大なる人物が現われている日本である。それはかくれたる偉人である。時勢には容れられぬ偉人である。故に（と云うてもよいだろう）、最も偉大なる偉人の類の偉人である。皆ルッター型（おかしな言葉であるが）の偉人、パウロ型の偉人である。かかる日本に生まれて僕もまた幸なる哉である。多くの浮薄堕落せる徒輩は居る。その極少数のかかる偉人に導かるる僕は何としても幸である。キリストの一度地上に現われし今の代にあるが故に。僕は、今となってはどうしてもこのことのために生まれたとしか思われなくなって来た。僕の道は日に日に明らかに示されてくるのを感ずる。内村先生、藤井先生に従って、政美兄上の跡を歩むのが道である。僕は藤井先生のお手伝いをしたくなって来た。聖書を朗読する。

○1925年9月11日（金）

晴。毎日、事物を観るに聴くに活眼を以てすることの大切なるを教えられる。これは今日の体験からである。僕は信仰の人、思索の人、体験の人であると自ら言うは苦しきことであるが、少なくもその卵である事は言い得ると信ず。更に深く祈りの人となりたいのである。それから一方、学究の人たることが必要である。かく学問の道に入っている僕が、世に立つ

て基督教を伝えんためには、やはり学究の人でなければ困ることは多いに違いない。故に学究の人ともならねばならぬ。宗教学、哲学は殊に必要である。語学にも、天然の知識にも、明るくなければならぬ。

信仰と思索は静かな時には祈りの形となる。基督教は、「我はかく思う」と云うことを教えない。基督教は、「神よ、願わくは……」と云うことを教える。深く考えるときに僕は神様とのお話しにうつらざるを得ない。そしてそれが祈りである。

友、松濤は学究の人である。彼は統一、整然たるものを求む。彼は哲学的の頭を有す。彼は、深奥なる仏教に求む。彼は信仰の人でない。祈りの人でない。彼は思索の人ではあろう。体験の人でもあろう。しかしこれは彼に力を与え得ない。彼に愛を注ぎ得ない。

聖書は統一していない。倫理的でない。しかし人生に最も密接である。人生に最も近きもの、それが真の生命を与えてくれるのでないか、真理とはそのことではないのか。哲学はもとより貴くある。しかし統一せる論理的な思想は貴くあって、どうしても人には冷たくある。何者か欠いている。人性はこれに満足し得ない。遂に更に貴きものへと向上する。そこに宗教を見る。しかしてこの哲学をみたす宗教、最も道徳的にして、最も宗教的なる宗教、最大の力ある宗教、愛の宗教は何であるか。それは基督教を措いてないのである。基督、彼御自身である。宗派でない。彼御自身である。

三位一体のことは、神学によってよりも何によるよりも、罪に泣く自身の体験によって最も明らかに事実として解る。基督教に於ては、知ることは信ずることである。信じられないことは基督教にては真に知ったとは云えぬことである。

ヒルティーの言うことはもう大体わかったと云う奴がある。彼の云うわかったというのは、この一言ですでにわかっていないことがわかる。ヒルティーの云うことがわかったということを言い得るのは、彼の言に従って「然り！」と云い得るときでなければならぬ。浅薄なる学究によって諸家の況んや作品をどうこう云う学生の不遜そのことがすでに大なるあやまりである。

もの知りは多くいる。彼等は僕にはあまりにクダラヌ友である。要なき者どもである。僕はこの頃、ことに独居を欲する。賑やかはごめんである。散歩も独りがよい。心のある友なら二人がよいだろう。不幸か幸か、まださせる真の友を持たない。富山なら好いかも知れない。僕は、あるものによって益々強くされる。

内村先生、藤井先生、畔上先生、佐藤先生は飽くまでも僕の真友である。僕はゆっくりとこの正しき道を歩むよりほかに道を一つも知らない。僕が文士だったら、恐らく日本のカーライルであろう。第一等のことの外書くことを知らないだろう。現代の世には読まれないものを書くであろう。極少数の人のみが読みて共に感謝してくれるもののみを。僕は今、第一等のものの外、読むものを知らぬ、読まんと思わない。新聞なんか近頃は殆どソッチノケである。恋愛の記事、殺人、強盗の記事、収賄事件、疑獄事件、議会のさわぎ、政

党の争い、選挙がどうのこうの、すべてこの世のウジ虫の動きとしか思われない。新聞をいくつもとって、1時間もの時間を費やす多くの馬鹿者の世の中に容れられないだけ幸である。女学生の堕落、中学生の堕落、ことに近頃の婦人の精神的に空なこと、驚くにも余りありと云いたい。もうどんな悪口を云っても、オッカナイからやめる。ただ、僕は僕の選ばれたる道を聖旨に従いつつ歩むのみである。友は、東西古今の真の偉人と無名の真面目な基督者のみ。神のみこころに就きつつある。大能の聖手にすがって万事は善し。

第2学期の第1日。今日は先生と聖徒との顔の見合せ。先生、何ごとか深き言を吐くにあらず、生徒活気に満ちて互いにまみゆるにあらず。依然として現代の教師も生徒も駄目。僕の責や重き哉と深き祈りに沈む。

僕は人を相手にしない。悪を相手にする。真理と議のために飽くまで戦う。僕にあたる人はあたれ。僕は弱く見えるだろう。また実際弱いものである。しかし僕にあたるものは禍なる哉である。何となれば、僕は弱くとも僕の内なるものは鉄よりも強きものであるからである。何ものも之を打ち砕くことが出来ない。あたるものが砕けるばかりである。そのことは審判の日によくわかる。僕の戦は十全の勝利ある凱歌を揚げつつの戦である。いかに人の眼にはやぶれたるが如く見ゆることありとも。この戦にあるとき僕は歓喜と感謝に満ちてある、生命を有ちつつある。そしてこれは永生への極始めの一部をなしている。幸福とはこのことの外に何もあり得ぬ。

ああ、かかる確信を有たせてくださるかたはどなたでありますか。父なる神の独子イエス・キリスト、彼に非ずして誰であり得ましょうか。アーメン。

川上の叔母様に長文の手紙を差し上げる。淳吉様のためのお祈りである。苦しくある。信者にあらざる人へであるから尚更であった。僕の全霊を篭めてかわいそうな淳吉様のためにであった。この祈りの聴かれんことを切に。アーメン。淳吉様の永生に生きんために、喜びの中に死のかげの谷をわたらんことを。アーメン。

○1925年9月12日（土）

晴、暑し。論理ノートあり、西洋史もノートあり、漢文も進む。独乙語は山田先生この夏訳されたという、Windelband, Einleitung der Philosophi〔ヴィンデルバンド著、哲学入門〕の大要の講義であった。有益な1時間であった。哲学は竟に宇宙問題を解する能わず、知るあたわず、「疑」Zweifel におわる。知的には竟に人生は何であるかはわからない。人生は実際である。ああ、僕はまだ学問をよく研究してないからよく知らない。またよく言えない。けれども僕は強く知る、信ずる。人生は真の基督教、聖書の真理によって知らるるの一事を。学ばんかな聖書。

「聖書の研究」はまた僕の仕事である。内村先生の偉大は何であるか。ルーテルの偉大、ポーロの偉大すべて何であるか。皆、聖書によってである。皆、生けるキリストによってである。

人類第一等の人物は皆、真の基督教によってである。この一事が明らかに示す。神を否定するにあらざれど、明らかにみとめ得ざる哲学者と、見えざれども真に在ますことを信じ得、人生を人生らしく送りし基督者と、いずれが人生を知りたるものであるか。かく云いても異論は出るであろう。しかし僕は、僕は躊躇することなく後者を然り！となすものである。ショーペンハウエルも人間苦に苦しみ、真面目に苦しんだから偉いにはちがいないだろう。しかし僕には慕わしき人生の伴侶として彼を慕うことが出来ない。リビングストーンは僕に人と云うものを教えてくれる。

ダンテの『神曲』は統一がとれていないだの、リビングストーンが個人主義だのと云う人は、どういう気でいったのか知らないが、僕の耳はこれにかすにはあまりにチガッテいる。真の基督教がわからない者がいう言は彼に説明したってわかりっこない。彼がキリスト教の何たるかを真に知るとき、即ちキリストを信ずる時の来るまでわからないのは当然である。ダンテやリビングストーンが本当に、ああダンテよ、ああリビングストーンよ、と云いて彼等にあつき涙を流して、我も汝等と共に十字架の道を！と云い得て初めて彼等が友であり、彼等を知ったと云うものである。キリスト教は深くある。謙遜なものである。

今日、松濤と共に帰って、彼と議論して色々のことを思わせられた。彼が、キリストの十字架や、キリスト我にあり、やなどがわからない以上、彼と宗教を云々することは僕に言い難き苦しみがある。あるところまで行くが、それ以上を説明することが出来ない。印度哲学を研究する彼は、実に基督の福音を伝えんために世と戦う僕とは関係なきものかも知れない。ただ彼が真面目な人間であるが故に語る。彼は宗教と哲学との関係をどうかしてつけんと苦しんでいるらしい。それが彼の畢生（ひっせい）の事業かも知れない。彼は実際問題と関係を保ち、いかにせば万人を宗教的にと考えている。彼は独創的な頭があるらしい。君も苦しみ給え。

僕の苦しみは君のとはちがう。僕の苦しみは先ず第一に、なぜ人はかくも不遜であるかにある。何故、己れの罪に泣くの心に帰り得ないか。何故神を認め得ないか、信じ得ないか、信頼し得ないか。何故！何故！と結局、人の罪のために嘆く。その滅亡のために憂う。

之に反して、人生の最大の力は何であるか、生命はどこに存するか。かく言い、かく思い来るときに、キリスト教の燦然たる光、歓喜を希（のぞ）みみて躍らんばかりになるのである。このことはただ智ではわからない。人に与えられた最も貴きものは智力でない、霊の力である。霊の渇（かつ）えたる声はここに向かって叫ぶ。智の声よりも霊の声（サケビ）が人間の真の声（サケビ）である。然り！アーメン！

『聖書の研究』第302号（9月号）が来た。内村先生の御講演拝聴の気分で熱誠をこめて拝読した。先生のお声そのものが耳朶（じだ）を打つの感がして、読書の速さはいつしかニブリ、ユックリと演説口調である。力のこもるところがあると、早速、青線が強く然り！アーメン！と云って紙上を走る。僕にこれほどの強き慕わしき友はない。ああ、内村先生よ、先生な

かりせば！　日本の最大偉人とは内村先生である。最早、我が日本もさほど外国に師をあおぐ必要がない。少なくも基督教に於ては、米国になんか行くよりもどんなに柏木に行った方がよいか知れない。あとは偉大なる基督教の書のみ。

『聖書の研究』はまた僕の声であると云わせて戴きたくある。勿論、『聖書の研究』が本当に親しき友の声の如く、然り！然り！と云い得るが故にかく云うばかりである。２５年、よく戦われた先生よ、先生の「私はクリスチャンである」がアーメンを以て読まれざるものに先生もわからなければ、クリスチャンもわからない。故にクリスチャンの資格もない。かくの如くである故に、真にクリスチャンたるものはいかに少数なることよ。

極少数者である。僕は段々、僕の歩みつつあるこの道がいずれに導きつつあるかを知って来た。神様に信頼して見えざる前途を歓び希(のぞ)んでいる。之である、クリスチャンの歓びの一つと云うものは。

内村先生がアマスト大学の庭内にて夢みられた美わしく多難なる前途は、之また僕の今の夢みている前途である。然り！　正に然り！である。内村先生、ありがとうございます。僕は何と云ってお礼の言葉をのべてよいか知りません。僕は涙ばかりであります。僕は歩むばかりであります。僕は十字架の道を勇進するばかりであります。之れが僕のお礼であります。

藤井先生、若き先生、僕は先生を慕い、先生のお手伝いをしたくあります。願わくは、聖書の研究を毎日々々僕がするためにお祈り下さい。戦いつつ、準備しつつ、この青年期を全力をつくして送り、進みたくあります。

今までの僕があまりに怠け者であり、あまりにイクジナキものであったために、この事がはたして僕に成し果たせるか心配でありますが、僕はかく新しくキリストによって生まれた以上はただ神にのみ信頼し奉りて、全力を尽くしたくあります。僕はたおれるまで。アーメン。

僕の信仰の歩み（１９２３年の春から2年間）は、しどろもどろであった。しかし驚くべき変化があった。いよいよ強くなって来た。悪魔はいくら僕を堕落の道へひきこもうとしても最早駄目である。光はあまりに明らかである。

朝の水浴びは爽快である。今日は猛烈暑かった。90度〔約32.2℃〕をのぼる位、1時から3時半までは何にも出来なかった。ひるねもした。夜はおそくなる。明日は安息日である。「苦楽」とか何とか云う雑誌を読む現代の婦人紳士?は禍の禍なる哉。女学校生も女中も、皆この類。あわれなる哉。多くの人は宗教はおろか道徳も問題になっていない。やっぱり末の世である。低級、野卑の至りである。もう彼等についてかれこれ云うまい。無駄である。

星が美わしく瞬く。秋の虫の音が涼しい。スウィッチョが机の上に飛んで来た。「よく来た、ちょっと！」と言ってつかもうとしたら飛んで行ってしまった。まだ5、6行批判を下したい人の言もあるが、それも今日はやめよう。

淳吉様、「安かれ、天国は近づけり」でありますよ。君は何もしなくてよい。ただこの世の最後に於て信じよ、神を、キリストを。そのときから君の新生ははじまる。願わくは、信じ給わんことを。アーメン。君に言いたいことはこの外に何もありません。

願わくは、内村先生の御健康を長く保ち給わんことを。御父なる神様、願わくは。

願わくは、藤井先生の御眼を事の畢（おわ）らんときまで用うるを得さしめ給わんことを、神様。

願わくは、母上に御恵を垂れさせ給え。健康を与え給え、神様よ、願わくは。

極少数の私の信仰の友に恵みを賜え。聖なる交をいつまでもなさしめ給え。アーメン。

○1925年9月13日（日）

半晴。聖日。詩篇を読むに当たって、己れの心を全く詩人の心に入れてせざれば、如何に読むともわからないのである。霊の声を頭によって知らんとしてそれは不可能である。こんな明らかなことを、知り得ないで頭で読もうとする人、研究的、批判的態度にすぐ出でる人は、聖書を読むことを全然知らざる人、彼等は読まざる方よし。

聖日を聖日らしく送り得ない人々のために苦しき祈り。僕が勉強していると思う人さえあるに至りては驚く。まぁそんなところかも知れない。敬神とはヨケイなことと思う人の多い世の中では。

武田叔母様に長文の手紙を差し上げる。今年の第何信になるだろう。10何回目だろう。僕の感謝は尽きっこない。歓喜も尽きない。死ぬまで僕の筆はこのことのために走るであろう。藤井先生にも手紙を書く。今日は静かな聖日であった。今秋最初の安息日は感謝の中に暮れ行った。

内村、藤井、畔上、佐藤、塚本先生は、何と云っても僕の5大先生である。この5人を措いて今のところ日本に僕の敬慕する人は居ない、否、知らない。そして内村先生は最大である。何となれば外の4先生の先生であるからである。哲学の宗教のと研究めいた、学者ぶったことを云うより先に、僕は「キリスト、救主（すくいぬし）」のみで、「在る」人間でなくてはならない。そしてそれが哲学を研究し、宗教を研究した後に於ても竟に、「キリスト、救主」、「イエスをキリストとして仰ぐこと」が人生の最大のことであることを知るに至るを確信する。科学、哲学、宗教、知的考察もし、知的に苦しみもすることであろう。しかし、ついに「人たれ」の一事を根本に置かないことは出来ない。「人たれ」とは何であるか。「イエスを信ぜよ」と云うことである。この故に上の5先生が僕の先生であって、その外に先生はない。更に言うことをゆるされるならば、5先生は僕を間接に導いたものであって、真の師は一人、ただ主イエス・キリスト在まし給うのみ。ロゴスとメシア、三位一体の神である。

○1925年9月14日（月）

晴。学校まで30分、時計の様に正確なものである。グンデルト先生、軽井沢の夏、忙しくて、

僕に返事を書くひまがなかったとのことである。教室でそのことを言われたから一寸赤くならざるを得なかった。先生に手紙を出したのは僕一人であったから。一寸、葉書ででも返事を下されば、僕は嬉しかったのである。しかし先生が不親切でないことを知っている。先生も喜んで受けられたことであろうと信ずる。

今日は1時間、この夏はどう送ったかと生徒に聞くことで1時間一杯であった。先ず松濤と来る。次に小池と来た。僕は沼津のこと、国府津のことを述べた。Ich hatte die dankbare Zeit……〔私は感謝の時……を持った〕と云ったら、こんなことは言えないとすっかり訂正された。Ich war dankbar für die Zeit die……〔私は……の時を感謝した〕としなければならぬと言われる。そのわけもわかった。

国語の時間には中村先生、冬彦集を朗読された。「電車と風呂屋」「丸善と三越」共に観察の妙と描写の流暢（りゅうちょう）なのとに、また真理をほのめかすところなかなか巧なるものと思った。もっとつきつめて言ってくれればなおいいと思った。

お昼はおばあさんの所でパン半斤10銭と云うハンブル〔質素〕なもの。松濤と帰る。お孝さんを見舞う。お菓子をもって行く。だんだんハレバレしい顔でうれしくある。時日はまだかかりそうである。隔離室であるだけにすこしイヤな気もする。

淳吉さんはどうだろう。神の特別のお恵みが下らないものであろうか。

電気屋に行く。佐藤繁彦先生に『宗教巡礼』をもう1冊おたのみする。歩いた。いい運動である。下の小澤の瀧の側に機械体操があるから、あれで腕の運動をすれば、すてきだ。

さて、帰途、平野書店で書籍を見通っている中、『詩聖ダンテ』中村昌樹を発見した。大正10年版、宛然（えんぜん）古本である。而も大分古ぼけている。10年の末あたりから4年間かくして書架に置かれて誰一人これを買わんとしたものがなかったのであろうか。いつか独乙語の「バイブル」Bibelを川又書店で唯1冊発見した様に、今日はこの『詩聖ダンテ』を唯1冊立っているのを見た。所謂古本ではないが古びた書である。今日、僕の手に落ちた。かかる書の如何に少なく読まれているかを之でも明らかに知った。「１９２５年9月14日、知らざる道へ。辰雄」と記した。然り、知らざる道へである。僕は行く。僕は世人の平凡の道、ビートントラック Beaten-track〔踏みならされた道〕を歩まんとしない。僕の道は知らざる道である。

極少数の人が同じく知らざる道と知りながら通った道である。神知り給う道にして、我等知らざる道である。この道が本当に確かな道である。困難も迫害もすべて善し、神知り給う故にあやまりはなき道、栄光の道である、光への道である。僕はこの道を敢えて行く。敢行である。万事信頼のもとに。アーメン。

之は6円の書であるが、親切な主人は半額で売ってくれた。僕は嬉しくてすぐ買った。勿論6円でも5円でも買うだけのお金は僕になかったからである。3円でさえ、蟇口は泣く様であったが、無駄な飲食やその他のことに使わない僕は、3円の良書を買うことはゆる

されたのである。『詩聖ダンテ』、愛する書よ、これは永久に書架にある書である。読まれる書である。感謝である。すべて僕の買う書は、売り得ない書である。いつまでも友としたき書である。年と共に親しき書である。我が子等よ！と呼びて側に置きたき書である。僕は天国に行くときに彼等に送られて行きたい。彼等の声は屹度別な言葉で天国に於て聴くであろう。永久に彼等は友である。愛すべき書が若し、我等が霊体に化せられる如く、朽ちざる姿で天国のライブラリーを飾ってくれたら、どんなに嬉しいことであろう。そして彼等の声が聴かれる以上、僕には之が信ぜられることである。幸なる聖国よ。慕うところは天にあり、である。アーメン。

今日、第1学期の成績発表。注意点（赤丸）、落第点（青丸）は一つもなかった。英語は80点以上の部であることがわかった。第1番でなかったことが癪（しゃく）である。1番に答案を出したのであるが。こんどからはゆっくりかまえて完全に書いてやろう。1番先に答案を出すということは気持のよいことである。虚栄の心は無いつもりであるが、それでもあるのしら。2年目の1年の1学期と、2年の3学期と、3年の1学期と、今までに3度ノー（No）丸をとった。2学期もとりたい。3学期も。とりたいのではない、ちゃんとやって居ればとれるのである。クリスチャンにその様な小野心はない。今年はまた無欠席である。

信仰をどうこういいたくないけれども、身体の健康もすべてが信仰のあらわれであることを確信する。僕はこの道の外に更によき道あることを知らない。

女らしくない女、男らしい女、ほど見にくいものはないと云うことを読んだ。本当にそうである。僕の知っているどなたかがそうである。女の強情なのは、飲ます薬がないといいたいくらいである。

今日、一人の友達が僕に言った、

「君は音楽家の様だ。ベートーベンに似ている。芸術家向きだ。詩人タイプだ。君の顔は実利的のことに向いている様には見えない。俗離れがしている。金儲けのことは君はまずいにちがいない。学問の道、研究的なことが僕には適している。君の様な人が実務家になっては勿体ない。君がそんなことをしたら、せっかくの日本の宝の持ちぐされだ。君は大いに日本の精神界に立ってくれなければ日本は駄目だ！」

と。彼の話をつづるとこんなことであった。勿論彼は之を、真面目一ペンの顔で云ったのではない。彼はしまいには笑っていた。僕もそんなにおだてるなよと云って笑った。しかしこの中に幾分の真が含まれていた。

顔がベートーベンに似ていると云うことはややうなづかれる。僕はベートーベンのあの真剣な顔がすきだからである。天的の顔であるからである。現世を睨んでいる顔である。芸術家向きはどうかと思う。詩人タイプはあるいはそう見えるかも知れぬ。僕が自然に居るときにかく見えるなら有難い。日本の宝とは驚いた言葉である。この言葉を吐いた友は、

級中の秀才、勉強家の斎藤である。こんだ、彼は英語は1番である。即ち彼に僕は少し負けた。2学期はとうだろう。彼を敵として戦うのは愉快である。高橋、斎藤、松濤は僕の3強敵。僕は「基督の僕」、クリスチャンが現世の勉強家に負けるべきものだろうか。クロムエルの勇を以て勇往邁進（まいしん）以て大勝を博せん。この秋は戦は内に外に。思うも肉躍り血湧くことなる哉。

本を読んでその中に何が書いてあるかがわからないほど、つまらぬことはない。ことに洋書を読んでそれを感ずる。つまらぬと云ったのは強く言いすぎたかも知れないが、やっぱりつまらぬとしか言えない。どうしてもわからせて進みたいものである。内容があまり難しいのならしかたがない。字義の一通りの意味だけでもわかればまずよいとする。他日わかるときが来るのを俟つ。時はよく之をさばいてくれる。

とにかく、何を言っているかに常に注意しなければならぬ。読書のときはその書に没頭してしまわなくてはならぬ。しからざれば効少なく、労多きことである。一事に熱心になり得る人が偉くなれるのである。これは明らかな事実である。僕も履行しなければならぬ。

9時、消灯して縁側に出で、跪いてお祈りをした。5分、眼を上げると、今まで電灯の光で見えなかった星が、急にハッキリと眼に映じ、「ああキレイな星だなあ！」とつぶやいた。と、そのとき流星が長く飛んだ。消える間際は著しく赤かった。恰も僕のお祈りが天にて聴かれたかの如く。Jupiter〔火星〕の輝き爛々たるものである。

○1925年9月15日（火）

晴。起床6時半、水浴。7時半登校。国文学史始まる。菅藤高徳講師来らる。パキパキしたところは良い人であるが、すこし品がない様である。独乙語の先生はどことなくゴッついたところがある様である。今日は誰一人、予習してあるものなく、「誰か？」と訳すべき有志を求められたときに、答えうるものが一人もなかった。僕は昨晩予習をしたのは「別の教科書」で吹田、小牧先生ので、之に答え得なかったのは残念であった。「小池君！」、「わかりません！」と云うよりほかなかった。「この次、責任を以てやって来てくれ給え」と云う先生の声。「よし」と思った。

希望の彼岸さして乗り出した上は僕は、万事神へ信頼し奉りて敢然として進む。僕はもうボンヤリして居られない。僕は過去20年の静けき湾入の中の舟行から、いよいよ大海に乗り出したのである。出航の帆を高く揚げたのである。波は高くある。ときには颱風も来るであろう。雨も降らん。雪もきたらん。雷も襲わん。しかし、太陽は常に雲のかなたに輝いている。月と星とは雲の間から見まもっている。希望の彼岸は待っている。大能は必ず救い給う、導き給う。希望の国は早かれ晩（おそ）かれ来る。

これからは独乙語を猛烈にやる。こんなに出来なくてはどうして独文科に入れるか。読んで読み破ってやる。英語も皆川先生の舌を巻いてやる。僕の負けずぎらい、ガンバリを

発揮してやる。僕はこの雄々しき健闘に勃々として燃え上がらんとしている。燃え上りつつある。青年の熱、青年の意気を青年のこの再び来らざるときに発揮しないでどうして居られよう。人生のこんな有難い時を無為にすごしたら、何を失うより惜しいことである。

ああ幸なる哉、かくもエホバによりて燃え立つ吾は！　内村先生の笑って居られるお顔が見える様だ。然り！　僕の奮闘はすべて聖書によって起たんがための一つの準備である。

三弦さんにも千鶴代さんにも隆一ちゃんにも、或いは無愛想と思われることがあるかも知れない。しかしこれは赦していただかなければならない。それほど時間を貴んで勉強しなければならないのであるから。

6時半、起床、水浴び。
7時前、お祈り、詩篇。
7時半まで、Daily strength for daily needs〔毎日のニーズのための毎日の強さ（書名）〕。
7時半、登校（道にて独乙語の句を暗誦、紙片に書いて）。
12時～1時、昼食、主として休息。
4時までに帰宅して4時から勉強。

夕飯まで、学校のことに費やす。とにかく、7時までの学校のことは予習まで終わらせてしまう。

7時から9時までは、独乙語。
9時、お祈り。
9時～10時、聖書のこと。
10時～10時半、日記、書翰。
10時半に寝ること。

消灯、おそくも11時。11時よりおそくなってはならぬ。

こんなに切り詰めてさえ、英語を読む時間がなくなってしまう。宗教、哲学の書もあんまり読めない。聖書は独乙語の時間をさいたり、また暇を作って読むことにしよう。英語といっても宗教書ばかりだから、日曜の午後に読んでもよい。図書館にいくときは、少しこれとちがった方途になる。

聖日には、午前は全然聖書のみ。午後は宗教書を聖書の伴侶として読む。書翰を多く書く。夜は9時のお祈りがすんだら、日記をつけて寝てしまう。

月曜の朝は、6時までに起きて勉強する。

土曜の晩は、12時までがんばって勉強してよい。土曜は時間があるから外の書が多く読める。かくして勉励する。

今日は15日で丁度月の半でもあるから、読書帳をつくろう。学校の書は必ず予習すること。これは義務であるから怠ってならぬ。ノートも眼を通して毎日くくりをつけて置く。僕の努力はとにかく尋常のものであってはならぬ。第一等のものであらねばならぬ。それでな

ければ、内村先生や藤井先生等に従って日本のために起つことは出来ないからである。僕は勿論、僕の名誉心にかられてこんなことをなさない。また、それでは出来ないことあきらかである。名誉心位でこんな真剣な聖書のこと生命のことが出来たら、それは聖書のこと、神のことでなくして、現世のこと名誉のこと金のことになってしまう。かく真剣である。真剣は僕である。僕は真剣である。

○1925年9月16日（水）

晴。理1乙の森田君を四寮23番に訪う。彼は基督者であるが、如何なる基督者であるかを知り得なかったが、大体教会風ではない様である。彼がよい友ならんことを願う。内村先生の著書を勧めて来た。

他人にうすく、自分の子に篤き偏愛は見苦しいものである。僕だから何とも思わないが、性質の強い人だと、もうその家に居るのはいやになるだろう。人を世話するときなどは、その逆になる位他人に篤くなければならぬと思う。物質の上にさえあらわれるから気持のよいことでない。それは、本当にその人の人格のために僕は悲しむ。

今日は6時間目ねむかった。が、図書館に放課後行って、好みの書を『宗教経験の哲学』佐藤繁彦先生訳、ルイス原著を読んでいるときは、頭が冴えて居た。これでは未だイカンと思った。30分の路をかえる。往復1里半〔約5.9㎞〕の道程を毎日歩くわけである。有難きこと。

僕は神様につかまえられた人間である。僕の方から云えば、神様に浸っている人間である。僕は今後どんなに神様を離れるような危険なときが来ようとも、竟に神様を離れることの出来ない人間である。僕はこの語を自分の確信から言わない。自分の限りなき弱みにかられて告白する。

愛する叔母様（武田）から、心からの御手紙が来た。有難く拝読した。僕の10数回の手紙には東京にて無返信で答えてくださることをお願いして置いた。しかるに今日御返事を下さったということは叔母様が如何に僕と共に感謝の声を揚げられたかを示すものとお察し申し上げるのである。僕のお願いをやぶられたので手紙の裏面に叔母様の御名の記されてなかったことは有難い。青木の叔母様と文通をすることは一つもない。それ故、武田からばかり来ては面白くないと思うからである。

〔註：武田の叔母とは母小池光子（5女）の実妹の武田松子（7女）のこと、夫は武田宣英。青木の叔母とは青木三杢の妻の青木がくであり、その子は青木三弦（長男、辰雄からみて7年上）、青木喬（次男、6年上）、青木実（3男、3年上）、青木四郎（4男、1年上）、武田宣彦（5男、1年下、武田へ養子に入った）、青木泰彦（6男、4年下、後に山形高校在学中病没）。また、吉原の叔母は母小池みつの実妹の吉原とも（6女）であり、その子は吉原吉彌（養子、15年上）、吉原貞子（4年上）である。（平成9年3月30日太田実

の記述他による）」

「真剣な感謝に充ちたお手紙、寧ろあなたのお祈りを拝見させていただきどんなに私の心が幸に輝きましたかとても筆にはつくされません。ほんとうにうれしく存じます。自分の甥という小さい意味でなしに人類のお一人としてどうぞこの様な真面目な信仰に生きられる方が一人でもある事がうれしく思わないで居られましょうか。……」

と書き出してあった。叔母様が喜んで下さること本当に感謝である。叔母様が同じ心を以て東京で送して居られる事を思うだに感謝である。政美兄上がかつて叔母様のためにも祈りて召され、しかしてそのお祈りが今日きかれつつあることの明らかなるは本当にお互いに涙の外はないのである。

そしてかくも言って下さる叔母様にお応え出来る人に本当になりたいのである。母上様、高島鴻子様、桑原（高島）嘉代子様、武田叔母様、平口繁子様の５人の女性は僕の心の友である、最も愛する女の方々である。勿論二人の愛する姉上が居られる彼女等の信仰のために、愛の種類がちがう様である。

〔註：「二人の愛する姉上」とは山本保の妻となった姉の富士子（辰雄の５才上）と、兄の小池龍二（６才上）の妻の順子である〕

女の方の信仰の言葉はあたたかくある。春の純美の花の如く接する。しかしけばけばしくもなければ、うわっつらでないが故に、ある強みを有っている。男性的の強みではない。実に男にはまねられない美しさが在る。僕はルッターの信仰を以て常に答えたい。女性的の信仰（？）には感情が強いかも知れない。それでは偏するおそれがある。これらのことは言い表わしがまずいのと、つきこんで考えたのでもないからまちがっているかも知れない。しかし今、ちょっとこう感じたのであった。しかしこれはこの５人の方々について言ったのでないことをことわって置く。勿論、僕自身にである。誰にも言うわけのものでないから。

○１９２５年９月17日（木）

晴後雨、すずし。限りある時間、限りある精力、敏速、熱烈になさざれば成り難し。このことを痛切に感じた。学校意外の時間は一日に５時間なるを思えば本当にしっかりやらなければ駄目である。学校の時間を有効になすことは大切な助けとなるものである。

今朝、待ちに待ちし『宗教巡礼』が先生の許から送られて来た。感謝に溢れていただいた。朝登校のこととて拝読にいとまなく夜読む。

「啓上『宗教巡礼』少し送れました。しかし２、３日中に発送します。御待ちください。なお有志があらば御紹介を御願いします。同様の便宜はかりますから。牛込区加賀町２―２、小池辰雄様。東京府下池袋９４６、ルッター研究会　佐藤繁彦」

〔ハガキの貼付あり〕

これは2、3日前に先生が御親切にも態々報せて下さった書面である。御多忙の先生、かくもなさるるとはつくづく敬服し感謝致すところである。

第1に聖書、第2に独乙語、第3にダンテ、第4に哲学、第5に宗教書類、第6に倫理。これが僕の日々の仕事の標準である。確乎たる方針のもとに進んで行くことが肝腎である。

往復1里半にすこし運動が加わるとなかなかこたえる。まだなれないためだろう。夜眠くなって困る。尤も御飯がよく食べられるのでそれも関係しているのかも知れない。しかしどうも困ったもんだ。空腹では勉強も出来ないだろうし。足がちょっちゅうホテリぎみである。頭寒足熱は、からだにいいけれども、ねむくなる。

まぁ、色々のことを思ったり、言ったりしたくなるけれども、我慢が肝腎。とにかく、やれ。そうすれば万事はよしである。

今日は額にカント大先生が入った。カントもベートーベンも額が大きく、眼が大きく光がある。僕は何といっても偉人崇拝者である。その偉人はとくに基督と真理に忠実な僕である。それでなければ僕には偉人はない。偉人とはこれらの人である。英雄、賢人、才士、大学者、詩人といえども、之に類するの人でなければ、彼等を慕うの念は起きない。汝は基督者である。よく憶えよ、偽は汝の敵。

１９２６年2月7日即ち僕が満22才に達する日までの計画は次の如くである。これは、如何なる困難をも貫いて成就さるべき重大事である。

◎Die Bibel〔聖書〕旧約全書、新約全書を一読し終ること。
◎ダンテの研究。
◎西洋哲学史。
◎羅馬〔ロマ〕書之研究。
◎ルッターの研究。
◎独乙語、英語の猛烈な勉強。

ダンテのあの顔を以て貫け！　血の汗を流しても之を断行すべし。骨と皮とになるとも血が流れていればよし。苦しまざれば救われざるなり。十字架の路、真剣勝負。基督のため。神の栄光のため。十字架。

これは誠に重大なことであって、勿論これから何年も出来る限り研究さるべきものである。満22の年を終え、23の年迎えるまで、即ち22才になるまでに（日本流なら今は22、西洋流なら今は21）、これを一通りうかがっておかねばならない。大学に入れる資格はここに存す。試験が問題でない。この生命のことをやるかやらぬかが問題である。やらなければ落第よりおそろしい死。やれば及第より喜ばしき生。

今の大学生とは何だ。汝は真の大学生となれ。泣キツツ書ク〔赤インクで記す〕。

○1925年9月18日（金）

雨。万葉集、挽歌の篇、悲愁の調（しらべ）に満ち、1時間の講義は静寂そのものとなった。お寺の鐘でもなりそうな情景である。小牧先生に久しぶりでお会いする。来年の3月まで習えるわけである。ただし隔週金曜に2時間、つまり1週に1時間というわけである。時間が少ないだけ熱心にやらねばならぬ。多忙な最後の半年であるだけに。実に恵まれたる感謝なる半年である。昨日も今日も、もう半年の前の方が過ぎつつあるのである。そして、感謝と希望に溢れて日を迎え、日を送っている。

小牧先生、Leiden des jungen Werter von Goethe.〔ゲーテの若きウェルテルの悩み〕
吹田先生、Kleine Schriften H. Wölflin.〔ハインリッヒ・ウルフリンの小さな文章〕
菅藤先生、Zwei Novellen von E.Th.A.Hoffmann.〔エルンスト・テオドール・アマデウス・ホフマンの二つの小説〕
山田先生、Gedanken & Erlebnisse von Prof.Hajime Minami.〔南はじめ教授の思想と経験〕
山田先生、Volkswirtschaftslehre von Prof.Dr.Carl Joh.Fuchs.〔カール・ヨハネス・フックスの国民経済学〕
Gundert 先生、Homer Odyssee.〔ホメロスのオデュッセイ〕

これが学校の Deutsch〔ドイツ語〕である。5人の先生に6つのことを教わる。しかし先生はたしかにいい。しっかりやる。独乙語と英語ではどうしても一番でなければならぬ。強敵が2、3人居るから面白い。勝算があるから油断してはいかん。嶄然頭角（ざんぜんとうかく）をあらわさねばならぬ。勿論、競争なんか目的でない。しかし刺激の鞭である。目的は他日事をなさんときの準備である。

神の聖旨に従って敢然と歩むものだと云うことを今日は一つの実験によって深く教えられた。よきに導き給う神を今日は、事は一小事ではあったが、見た。これはまた奇蹟の小なるものにして、またたしかな事実であった。僕は奇蹟を望まない。このんでも居ない。しかし、奇蹟は信ずることが出来る。人の眼には奇蹟でも、神の聖旨なる故に偶然でもなければ不思議でもない。明らかに事実である。アーメン。

団君に会う。団は同じく田見小路に住んでいる。3年の後半年を彼と同じ町に住んで水戸を去ることになると思うと、その縁の不思議なるに思い入る。彼はかつて政美兄上から英語を教わっていた。附中の入試に体格で不合格、成績で一番と云う人である。そのため青山学院に入った。学習院へでも行く人かと思いの外、水戸に来られた。そして僕が病気でおくれたため同級となった。理3甲の秀才である。1学期はノーマル（No丸）であった。何となく、そんなに話もしないのだけれども、親しい彼が近所に居る。彼と話をする、散歩をする機会を与えられたのだと思う。よき友であるからこれからなさんと思う。

いよいよ来た。あまりに準備なかりし僕には、美わしすぎるものが来た。敢えて迎える、身を投ずる、美わしきもの、聖なるものは、僕のただ一つの熱烈なるものが之を迎え得る。

他のものは未だしである。他のものはやがてその資格を得ん。最大のものがこの聖美を迎えるに適している。そは何であるか、神よりたまわりしこの心である。これありて、僕の準備は半ばよしである。そしてあとの半もまた大切である。後の半はこの半によりてのみ生ずべきものである。他の不浄をゆるさず、それをこの半年でとにかく作らねばならぬ。そして一つ高きところへ進まねばならぬ（外形的に）。僕の道はこの春曙光（しょこう）を見たそのものであるらしい。それは夢の光でないらしい。事実となってくるらしい。汝、読書のとき眼光炯々、鬼神をして寒胆からしむるの慨あるべし。

○1925年9月19日（土）

晴。今朝は6時に起きた。小澤の瀧（実は泉と云った方がいい位）を浴びに行く。今日は誰も居ない。僕が最初であるらしい。浴びおわって坂を上って来ると、一人の例の人に会った。30分はやければコンナものかと思った。ただし、靄（もや）がおりて居て森の木の葉から雫がしたたる位で冷気は先ず膚に沁む。その上浴びるのであるから相当である。随分鍛えられる。我慢と勇気が要る。一旦定めたこと、よしと見たことなる以上、断行するのが日本男児である。

人は読書する、批評する。しかし人の眼はどうであるか。真に批評をくだし得る人が幾人居るか。僕に言わせれば、批評する人もまた批評することそのことによって批評されていると言いたい。批評するならもっと根底のしっかりしたものが出来てから、静かにやってもらいたいものである。

今日はこういう事も考えた。偉人は偉大な頭の所有者でもあったろうが、それ以上に正直な人、勤勉な人、活発な生き生きした人であることを。すくなくも僕が知っている慕わしき偉人は皆之である。僕の頭はボンクラであろうが、偉人の正直なところ、勤勉なところ、生き生きした気持のよいところだけは真似たくある。そしてこれは出来ることである。僕のこの頃読書に飢えていること。本当に今日は図書館に居て、晩食がここで食べられるならもっと遅くまで居たい様な気がした。

昨日、川上貞子おば様から御返信が来た。憂愁の情がうかがわれてお気の毒であった。大学との対抗フットボール、ア式は1対0で勝、ラ式は大敗であった。

常磐病院で看護婦死亡につき解剖が行われたそうである。医学研究の上必要なことでもあろうが、使われていた看護婦が解剖されたと云うことを聞いて、僕の心は安らかでなかった。僕がもし医者だったらどうだろう。僕はこの事は何としても出来ないことであろう。仮に考えて見るがいい。自分が死んで解剖されるのだと云う運命を。それはゆるされることであろうか。僕は医術の進歩よりも人の心の篤（あつ）からんことをのぞむ。執刀した医者は数人あった様だが、彼等は執刀する前に謝罪をしたか。神に祈ったか。問題はここにある。その真剣な同情があったか。いかに医者とはいえ、専門とはいえ、これがないならば、解剖はゆ

るされないのであると僕は思う。しかして事実は果たして如何。

大学は独文科か宗教学かに定まって来た如く感ずる。独文学の試験は二人の一人と云う割合である。これに落第する様なヘマ、醜態を演ずることは断じてあってはならない。文科は自分から勉強するところである。将来は多忙である。愉快である。ただ「彼」によりたのむによってのみ愉快なのである。その外に愉快はない。すべて人と云うもののために、はたらくのが僕のつとめである。

○1925年9月20日（日）

晴。聖日。冷水を浴びる。午前は静に。佐藤先生の『宗教巡礼』は大変面白く有益である。全く独乙人の学術的なのは敬服に価する。高等学校生活に宗教的雰囲気と云うものは一つもない。日本人の心のむくところが国民全体として高尚でなければ駄目である。この宗教心のすくない、敬虔の念にうすい日本人の中で、幸にもかく選ばれ呼ばれた以上、僕はこのことのために働かねばならぬ。

僕は昔は宗教心はちっともなかった。神様なんてなんだ、キリストなんてなんだ、寺だの教会だの僧侶（ボーズ）くさくてたまらぬ、と思っていた。何の理由も穿鑿（せんさく）もなしに。しかし僕は、偉人崇拝の念は昔から植えられていた。修養の時間に偉人の幼年時代、少年時代、青年時代などの逸話を聞かされるのは大好きであった。弱い性質の僕でありながら、偉い人になりたいと思っていた。『少年鑑』と云う（東西古今の英雄、偉人、孝子、烈士の小伝逸話集といった様な）本を愛読した。リンカーンがことにすきだった。今もなお、否、益々然り。ビスマルクの肖像画を2時間にわたって熱心に書いて英雄崇拝に燃えていたこともあった。いくじなしのくせに理想はなかなか高かった。こんな気質がついに僕を宗教にまで導く一つの助けとなったのであろう。幸にして中学時代に悪友多かりし（僕の）級にて僕は彼等の誘うところとならずにすんだ。政美兄上が居られたこと、それから僕自身の正義、善をこのむに強くあったことにより彼等の味方とはなり得なかった。

水戸の師範学校の側の図書館へ初めて入って見た。3年余も水戸に居て初めて図書館に入るのだから、自分ながらそのナマケサカゲンにあきれたほどである。こんないいものをなぜもっと早くから利用しなかったかと、今更ながら言って見たところで仕方がないが！学校の図書館を利用しはじめたのもついこの頃からである。

一体、性来読書きらいであった僕は、近頃非常に読書ずき読書欲に燃えて来たのである。これは全くこの新生によって得られたる産物である。勿論、濫読（らんどく）はしたくないのである。良書がなかなかあるから、第3等以下の書はなんとしたって読む余裕がない。第1等の書か第2等といってもいい書である。

読書力がないから骨である。僕にして政美兄上のあの読書力あらば、どんなに此の頃は役立つことであろう。とにかく兄から見ると劣っていること疑もない。兄が1日でするこ

とは3日かかるだろう。しかし考えて見ると、兄が高等学校3年のときの学力を得るためには、僕にはあと2年を要する。2年、そんなに悲観したものでもない。とにかく兄の弟である。兄と血を分っている弟である。それに兄のことが出来ないわけはない。兄が早くゆかれたのは、僕に一層たのまれたことである。僕はたおれるまでこの事をする。他の事をして百年生きるよりこの事をして五十年生きる方がはるかに優れりである。然り！　この事のために起つ。

昨夜は不思議な夢を見た。それは、ある預言者の様な、占者の様な人が居て、僕を見て

「汝の右の腕には非常な力がある。その右腕の力は汝を不思議な幸運に導く。汝は

それだから敢行しなければならない」

と云う意味のことを云った。そしてこれを聞いた僕は夢の中で非常に感謝し、非常に喜んだ。今目がさめてこのことを考えて何のことだかわからない。しかし、非常な力に満たされていることだけは事実である。

来るべき1週間、願わくは更に強く歩ましめ給え。信頼にしっかり歩ましめ給え。つまらぬ思い煩いを去らしめ給え。大きな光をのみ望みて神の子らしく歩ましめ給え。かのときから満4年になります。僕は本当に大きい兄さんの変化である様に感じます。願わくは5大先生をのみ先生として第二の国民の指導者たらしめ給え。

加賀町〔小池家〕、西大久保〔武田家〕、中渋谷〔高島家〕、中野〔山本家〕にお恵み垂れさせ給え。アーメン。

詩篇第20篇に、

「6 **われ今ヱホバその受膏者をすくひたまふを知る。ヱホバそのきよき天より**
右手なるすくひの力にてかれに應へたまはん。」（詩篇20・6）

とあるを今発見して、畏れる次第である。

○1925年9月21日（月）

晴。起床6時半、水浴。登校7時55分。遠くなるとかえって学校に早くつくものである。1番早い。途中でグンデルト先生に会う。今学年は全出席、無遅刻をやりたいものである。これからが骨である。しかし、やる。勇を振るって。放課後、Lüben und Nocke の “Einführung in die deutsche Literatur”〔ドイツ文学入門〕の Luther のところを読んだ。大変いい本である。これから屡々（しばしば）かりるつもりである。

“Hier stehe ich, ich kann nicht anders! Gott hilfe mir, amen!”

〔私はここに立っている、私はかく〔告白〕するほかはない、神私を助け給わんことを、アーメン！〕

〔註：歴史的な1521年4月18日、ヴォルムス国会でのルターの偉大な否（ナイン）。著作集第7巻『聖書の人ルター』参照〕

のLutherの叫びを僕の今の叫びとさせてください。この一句を独乙語で知りたくかねてから思っていたのを、今日発見し得たことは実に有難く、僕は学校の本に将に太く青線の下線をヒッパリそうになった。ひっそりした図書館にAmen! とひびきそうになった。辛くも僕の口は閉じられた。

１９２５年９月21日この語をLutherの生ける語として聞く。そこに何か意味がないか。否、大いにある。僕は勿論学校の図書館でさがし得ようとは思っていなかったのに、而も今日、日もあらろうに今日これを発見したことに意味がないとはどうしても云えない。１９２１年９月22日は忘れられぬ日である。即ち政美兄上の召されたよき日である。その日を明日にひかえた今日21日である。僕は明日は東京へ帰ったら、兄上の霊前に平伏して祈り且つさけばん。

“Hier stehe ich, ich kann nicht anders! Gott hilfe mir, amen!”

と。４年！　４年！　４年を経たのである。

「茲に余は起つ、余は起たざるを得ず。神よ助け給え、アーメン！」

である。我をそしるもの、あなどるもの、笑うもの、我より貪らんとするもの、我をせむるもの、すべて汝等の為すがままをなせ。我は汝等と関わり争うにはあまりに、真剣である。勤勉である、多忙である。真面目である、信仰に燃えてある。

ここに謹みて「佳き日」の明け行くを待つ。

神よ、願わくは、キリストの最も忠なる僕の一人となさしめ給え。アーメン。

○1925年9月22日（火）

晴。第４年。１９２１年９月22日、忘れられぬ彼の日から満４年を経た。兄と僕との年の差は９年。

〔註：小池政美 1894/7/15～1921/9/22。辰雄 1904/2/7～1996/8/29。兄政美と弟辰雄の年齢の差は約8年7か月である〕

兄の地上の年27に及ばざること５年である。兄に近づくこと４年、望み多き５年が残っている。合わせて９年（苦年）。９年は苦年である。第二の政美は現われつつある。政美兄上よ、喜ばれよ、兄上の祈りは聴かれたのであります。一人の基督者が兄上の愛し下されしこの辰雄に現われたのであります。何と意外なことではありませんか。僕にも意外なことであります。しかし、神様が兄上を以てかくなされたことを読み考えますときに、僕は涙を以て感謝し奉るのでございます。

世に美わしき関係とて基督者の兄弟のかかる関係ほど美わしきは無いんでありませんか。ただ一つの望み。主イエス・キリスト在ますが故に。主イエス・キリスト来り給うが故に。

今日も放課後、Lüben und Nocke の “Einführung in die deutsche Literatur”〔ドイツ文学入門〕によってLutherについて調べて有益なる２時間を図書館にすごした。

今日は菅藤先生に独乙語のリーディングをすっかりほめられた。むずかしいところへ来ると「小池！」と来る。先まで調べてなかったので答えられなかったのは何より残念であった。ばかに信用されたものであった。思った、僕はこれから学校でやる倍の分量を予習しようと、少なくも。然り、この勢いである。今は丁度乗り気の絶頂にある。これを持続すべきである。高校3年の最後の半年をウンとしっかりやればその効たるや非常なものである。然り、僕は独乙語では学校で一番になりたい。それでなければ独文学をやる資格がない。然り！　僕はうんとやる。グングン読む。僕は過度の勉強をややもすればやる様になって来た。その予防は、第一に睡眠時間の厳守である。これさえやればまず間違いなしである。夜は10時半に就寝。朝は6時半に起床。之を厳守すべきである。家が遠いから運動はいやでもさせられて幸である。食後は30分位ゆっくりしなければならないだろう。あとは、「もうグングン」である。それから1時間ミッチリやることを要す。1時間続けてミッチリやったら必ず10分位の休息をとることを要す。そのかわりダラダラした勉強は禁物である。こんどの時間から英語でも独乙語でも、先生を驚かすほど勉強して行く。もう僕は全く独文学へ行くことになって来た。

兄上よ、兄上よ、天の兄上よ、僕の声を聴き給わざるや。この喜びと希望の声を聴き給わざるや。兄上よ、我が途は開かれり。兄上よ、兄上はあまりに近く在ます。僕は何にも言わなくてよい。兄上よ、見よ！　あと半年の僕の奮闘を。来るべき春に何が起こるかを。ルッターと内村先生と藤井先生と畔上先生と塚本先生とを師として勇往邁進（まいしん）する僕を助け給え。天にて援（たす）け給え。

「辰雄！　しっかりおやり！」

と今日叫んで下さい。僕は毎日の短きお祈りのおわりにこの声援を聴きましょう。

「辰雄！　しっかりおやり！」

然り！　僕はルッターに従って、

「茲に我は起つ、起たざるを得ず、神よ助け給え、アーメン！」

であります。感謝なる一日は暮れ果てた。4年はすぎた。5年目の第1日が明けて行く。

○1983年9月23日（水）

晴。秋季皇霊祭。

「[33]**まづ神の國と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。**」（**マタイ6・33**）〔**独文**〕

第5年の第1日は明けた。

"Hier stehe ich, ich kann nicht anders! Gott hilfe mir, amen!"

〔私はここに立っている、私はかくするほかはない、神私を助け給わんことを、アーメン！〕

残る5か月、短い月日である。全力尽くして学ばねばならぬ。

1 When we cannot see our way,　〔直訳：自分の道が見えないときは、
Let us trust and still obey;　信頼し、それでも従いましょう。
He who bids us forward go,　私たちに先へ進めと命じる彼は、
Cannot fail the way to show.　その道を案内しないわけはありません。
2 Though the sea be deep and wide,　海は深くて広く、
Though a passage seem denied,　航路は拒否されているように見えますが、
Fearless let us still proceed,　恐れることなく私たちはそれでも進みましょう
Since the Lord vouchsafes to lead.　主が導いてくださるので。
Primum vivere, deinde philosophari.　最初に生き、次に哲学する〕

然りである。

汝は一日に必ず偉人の顔を見なければならぬ。汝の周囲は俗人ばかりである。彼等にひき入れられざらんために、汝は机上の偉人と面会する。この頃はベートーベンである。彼の偉大なる額、深みのある眼光、峻厳に結ばれたる唇、その真理にするどく聴く耳とを見よ。こんないい友達は居ないのである。こんないい先生は居ないのである。

僕は飽くまで、偉人を師とし友として生きたくある。最大の師、我が主イエス・キリストの許にて。若しベートーベンにしてただ天才なるならば、僕はベートーベンを友としないであろう。彼は真理の前にへりくだる人であった。それ故に僕の師である、友である。

今日はダンテ研究であった。然り、僕は夢みたくある。聖なる、美なる、真なる、善なる夢を見たくある。最も懐かしきものは夢である。夢の聖国である。キリスト在ますことも、聖徒皆眠りてあるか、いかなる状態であるか知らねども、彼等が死んでいないこと、キリスト来臨し給うこと、すべての復活、聖国の来ること、これすべて夢のことである。我が信ずることはすべて夢である。哲学者の形而上のことも実は夢のことをさぐっているのである。我等が説明せんと欲するが故に失望失敗である。夢は眼に見る様に現わし出すことは出来ぬ。

夢は、我々が肉眼を以て見、我々が智を以てさぐるよりさらに高尚な難しいものである。勿論この夢は普通の夢でない。幻を描いて喜ぶ如き夢でない。人に上から下る強き力がこの夢の最も貴く、最も真なる唯一の生命を与うるものなることを示す。その力は信によって（信仰）のみ之を受けることの出来る力である。

僕の全生涯はこのことの験証（アカシ）のために捧げられる。と同時にそれが生命への道、生命そのものの最初の一部をなす。永生は「在らんとして在らんとするもの」が常に与え給う。ダンテもミルトンも結局このことを叫んでいるのであると信ずる。彼の『神曲』、『失楽園』などは今解し得ずとも、今に屹度（きっと）僕のものとなる。起こるべきことが起こって来たのである。このことを確く信じて、僕は本当にルッターに倣いて、「堅城は我等が神なり」を絶叫し得るのである。

言葉は比喩的であり、不完全であるが、人間の今の不完全にはまたふさわしきものである。この美わしき人生、聖なる人生を、歓びと凱歌を挙げざるものは誰であるか。ああ不信の世よ、神は泣かれるのである。神の業はもと歓びの事である。

第５年の第１日はかくも歓びに満ちた。かくて僕の進むべき道はいよいよ外とはなれて来た。

今日散歩して、監獄側の急坂を上って来たら、前に重荷をひっぱって上り行く小僧を見た。彼は全力を尽くしている。僕は到底同情位では抑えられなくなった。僕は急ぎ寄って、後ろから押してやった。醤油樽を積んだ荷車である。僕もいい運動と思って全力を尽くして助けた。彼は坂を上ってから言った、

「本当にお陰様で助かりました。有難うございました、有難とうございました」

と丁寧に帽子をとって。僕も、彼の真に喜べる面持を見て、帽子を脱いでこれに応えざるを得なかった。「いや、かえって！」、その後に言わんとすることは口から出なかった。かえって神様に感謝することなんです、と云う意なのであった。人があんなに喜ぶことをただ同情位ですぎたらどうであろう。人の幸はこんな小さなところでも差を生じてくる。そしてそれは大きな差となるのである。

15尋〔約27.4ｍ〕の井戸の水掬（くみ）もいい運動である。女中が喜ぶことでもあるから毎日の日課である。９回も掬むと相当ヘバル。

哲学がついに行きつまって、ウタガイに終ることを宗教は力を以て示す。人は竟に宗教に行かざるを得ず、人生は実際であるからである。抽象でないからである。哲学もまた人間の真剣の苦しみから生じたから貴い。しかし宗教はさらに強き苦しみと人間性からのぞまれるものなる故に最も貴い。

哲学と宗教を全然別視することは出来ぬ。しかし真理の表と裏と視ることも出来ぬ。宗教と哲学は交々（こもごも）、人の求むる心に起こって来る。そして相助けつつ人の心を満ちて行く。そして竟に宗教が人の心を救う。宗教は終（つい）に哲学によってたすけられない。哲学が終りに於て宗教にたすけられ、みたされる。

そして、人の最大の満足は満たされること、達せられることでなくして、信ぜしめられること、限りなき生命にあこがれのぞみまつことである。人性は欲求、結局欲求の一つに帰す。その最高の欲求に生きるのが人の目的である。その最高の欲求の何たるかは、人類の歴史があきらかに示している。そしてそれが神の人を創り給いし目的であることも示された。歴史的に今から１９００有余年前に示された。即ちキリスト、我等の主によりて。アーメン。

しかるにこの欲求を殺してしまうことは人の生を殺すものである。故にかの厭世的の思想は人生に不忠実なものである。

今日は青木の叔母来らる。例によって酒で御機嫌である。俗臭たっぷり。僕は勿論おか

れた杯に一滴も受けなかった。消化をたすけるために一杯は身体にいいと云うが、そんなことも僕はもう受けない。僕は全く禁酒である。

〔註：以下の祈りの文章は最後まで赤インクで記されている〕

神様、僕をつかまえて下さった神様。僕は本当に今日感謝に満ちて何と申してよいかわからない位でございます。政美兄上が御許に召されましてから丁度４年経ちました。色々なことがございました。すべての罪をおゆるし下さい。僕はもう神様の外に何にも頼ることを知らない人間でございます。

アナタがおすてになったら、僕はどうしましょう。どうかいつまでもいつまでもつかまえて、上へあげてください。すべての世の悪から救い出して下さい。基督イエスを主とする忠実なる僕たることが僕の全部でございます。かく育てて戴きまして、地上で22年になります。随分僕は聖旨をはなれて幾度となく悪魔の手中に陥り死境に沈淪（ちんりん）いたしました。それでもなお、アナタは悪魔の手から僕を奪い回（カ）えして下さいました。そして僕を救へ、生命の道へお導き下さいました。この大なる恩恵を僕はもはや無にすることが出来ません。僕にアナタの聖手に導かれて永生への道、十字架の道を歩むことが即ちアナタの恩恵に答える一つの唯一の道でございます。願わくは、永遠（とこしえ）に救い給え。小さきの器をお使い下さいまして、神様の栄光をあらわし給え。すべてアナタの御光のためでございます。

僕は待ちました、いずれの道へ行くべきかを待ちました。神様は知らざるうちに僕を段々神様の道に導き給い、僕のためによき道を示して下さいました。兄が召されまして４年になりました。今日、驚くべき道が僕の前に展（ひら）かれて参りました。理科に行こうかと思った僕、それから法科に行こうかと殆ど定まっていた僕が遂に文科に行くことになりました。それはただ神様と僕のお話、神様が僕に示された道（職業上の）でございます。僕は真理のためにキリストの戦士として勇ましく進みます。

「まづ神の國と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。」（マタイ6・33）

と主の宣いし御言を有難くうかがいまして、これによりて、これに信頼し奉りて、僕は一生を送らんと確く定めました。願わくは神よ、救い給え、助け給え、聖旨なさしめ給え。かつて勇ましき一戦士ルッターが叫びました叫びを、今僕は僕の叫びとして叫びまつります。「茲に僕は起ちます、起たざるを得ません」。お父様、神様、願わくは助け給え。アーメン。貴き我等が救主イエス・キリストの御名により聴（きこ）し召し給え。アーメン。１９２５年９月23日（９時～９時半）。

○１９２５年９月24日（木）

半晴。さて世の中は、不信な人、おめでたい人、神を知らざる人、傲慢な人、のんきな人、生を無為に貪る人、虚栄の人、貪婪（どんらん）〔非常に欲が深いこと、むさぼるさま〕な人、吝嗇（りんしょく）〔ひ

どくけちなこと、しみったれ〕な人、浮薄な人、義務に不忠実な人、我儘な人、むら気の人、……などあらゆる悪を以て満ちている。

謙遜な人、敬虔（けいけん）な人、忠実な人、信仰の人に至っては幾人あるであろうか。２０世紀の文明に生きる人間がそも、此くの如き人によって満たされているなら、文明とは何である、政治とは何である、宗教とは何である、学問、教育とは何である、芸術とは何である、運動とは何であるか。20世紀のすべてのものを疑わざるを得ない。人は宗教によらざれば生くる能わず、根本はこれである。

失敗は明白なこと。「我すでに世に勝てり」と宣（のたまい）し故に、我等が事業は失敗である。失敗であるが、宗教のために、人の生命のために、尽くすのが最高最大のことである。故に僕は敢然として進む。

すべてこの世の否に反抗する。彼等が然らずと云うときに僕は天からの声の然りを聞かん。彼等が然りと云うときに僕は天よりの声の否！を聞くであろう。ここにルッターの「アイン　フェステ　ブルグ……」〔神は我が堅き城〕は僕の歌となった。

今日はバスケットの対級戦に出て我が軍、惨敗。しかして快楽であった。皆一生懸命にやって、滝の汗を流してやったから。帰って来て、ガブガブと泉の水を呑んだ。

顔は心を表わす。僕はこの頃、自分の頭、顔の趣きが大部変わってきたのに気がつく。前額が丸くふくらがり上って来た様に思う。前頭が盛り上がって来て前頭左右にあった大きな谷がだんだん、山と変わって来た様である。前頭左右端は相変わらず両側に出っ張っている。耳は相変わらずの大耳で立っている。眼は僕の心を現わす様になって来た。鼻は鋭く光って来た。眉毛は前より濃くやや太く起っている。口は相変わらずへの字形であるが、しまっている時が多くなって来た。

机上のベートーベンが僕を睨んでいる。僕も相和して睨みかえす。そうすると、B.と僕との心はピッタリ合う。そして僕の顔がだんだんB.に似て来る様に感ぜられる。Luther〔ルッター〕の顔にも似たい。勿論僕の顔は段々、政美兄上に似て行くこと、これは事実であるらしい。よく人が云う、「段々、政美さんに似てくる」と。真面目にそう言ってくれるなら嬉しいが、似ることの何を意味するかを人は知らない。L.の眼光もB.の眼光も同じである。また一方、Lincoln〔リンカン〕の好々爺然たる天真爛漫がありたい。と、またWhitman〔ホイットマン〕の様に俗ばなれした詩人然たるところもありたい。

宗教家、音楽家、詩人、正義を慕う天真爛漫の人の顔を渾然としたもの。それはどんな聖なる顔、慕わしき顔であろう。そういう顔はどこに見られるだろう。それは唯一つある。主イエス・キリストに於てある。ああ我が主の聖なるかな。W.もLi.もLu.も主の聖顔の一部を、そして僕もその一部を、でありたい。それは神様が創り上げてくださる。僕はそれを受ければよいのである。自分で高からんとしてつくらんか。ああ、それは驚くべし、怖るべし、サタンの顔の一部が出来る。その顔を偽、虚、高慢、等となづく。

○1925年9月25日（金）

雨。今日も感激に満ちた一日であった。何故、それは実に強きあるものに打たれて。経済学を研究せんとするもの、哲学を究めんとするもの、僕の級にも色々である。福音のためにと云う人は一人も居ない。僕は段々とその色彩を現わすともなしに現わす様になって来た。基督教とは何であるか、ヒルティーの『眠られぬ夜のために』を耐え忍んで読むべきである。それで心眼が開かれなければ、未だ未だ遠い人であると僕は言おうか。僕はあまりに怠けものであった。しかし僕は時期におそいとは決して思わない。神様がお思いになったときなのであるから、僕はよきときに召されたのである。かくなりたるからには、僕は全心全霊を尽くし、全力をあげて、神のためにする。研究もする。

さて、独乙語では何としても学校第一にならねばならぬ。確(し)っかりやれ、あせるに及ばぬ。しっかりやればそれでよい。実は、友達に勝とうだの何だのと云うことは問題でないのである。汝の道が独乙文科なる故に、他のものに劣ってはつとまらぬと云うこともあるからである。いや、これとても理由にはならない。

どなたかが隣室で五月蠅(うるさ)くシャベッテいる。勉強の妨げたること甚大、2時間半と云うものは完全に妨害された。僕の大切な勉強の時間を察して下さらぬのか。お酒の機嫌と、偏愛の上機嫌ですっかりアテラレ、而も人物評のいやらしい話、金のはなし、人に恩を帰せる話、殆どケトバシテ室を出たくなった。

迷える、否、麻痺せる魂の有ち主のお集まりと云うものは困ったものだ。僕は世の中を「救いの道へ」と思ってかかる場面を目撃するときに全く失望する。彼等が心から神を讃える日は絶望のことに属する。僕は何のために本当にこんなに苦しむのだろう。わざわざ困難な道へと自らを入れて行く様に感ずる。しかし僕がそうするのでない。やはり、あるものがそうなさるのである。僕はもうこの世の人にはわからぬ奴隷である、気狂(きちがい)である。それでもよい。これが僕の最も深きものにうったえる真であるから。

実様から返信が来る。真剣な衷心からの御手紙で、感謝して読んだ。親戚中の人物は実様であろう。ただ実様が大酒をよくすることだけは僕にわからぬ。世俗的と云ってはわるいかも知れぬが、僕や大きい兄さんの様に脱俗的、詩人的気質はない様に思われる。実様は理性的、論理的なところが多いのではないかと思われる。責任の人、コントロールのある人であることは確かである。基督教は直観的なところがある。かく、人を論ずるは気持のよいことでない。悪いことである。ほめることはよい。欠点を指摘するはよくない。人の美点を見て交われば、自然その人に対して嫌悪の情を抱くことなく、あたたかく交われることであろう。

明日はお孝さん退院の由、東京まで一緒に行って上げる。帰っても、要なきにしもあらずであるから。日曜には藤井先生をお訪ねするつもり。これはたしかに目的ある一大事である。

○1925年9月26日（土）

晴後雨。あわれむべし悲しい哉、淳吉様は今日、他界された。苦しき祈りはやはり苦しい方へと終った。やむを得ない。淳吉様はしかし何故あれほど不運であったか。神様、天にて淳吉様の霊を安きに導かれよかし。彼は終に僕の叫びも聴かなかった様である。彼の臨終に僕が居たら、讃美歌をうたって天へ送ったのであったろうが。惜しむべし。僕は水戸に居る。この間の僕の手紙、川上の叔母様は読んで上げたかしら。慰安があれで出来なかったかしら。

午後3時半の汽車でお孝さんは退院で帰京。僕も一緒について行く。青木の叔母様も一緒。お孝さんは本当によかった。猩紅熱も殆ど全くなおったのである。否、全快である。車中にて外の雨景をながむ。涼しいこと言わんかたなし。利根川にさしかかるころは霽れる。西の広原に春き行く夕陽。紅の空、金波紅波を漂わす水。ああその没し行く景。車中にて『宗教巡礼』を読んで、感極まって然り！アーメン！をとなえた。そのとき、夕陽はかくの如き景を呈していた。僕は静かに没し行く陽を見やり、einst ja einst zur Abendzeit〔いつか、そう、いつか夕刻へ〕を思い浮かべ、交々感極まって独りうなだれて祈祷した。幸に車中は空いていた。

帰宅8時、丁度皆様夕食。美味しくいただく。この晩は兄と未だかつてなかりし激論。母上は側で聴いて居られた。僕が文科へ行く決心を明言したので、兄上の不満、不賛成ををそそりたて、ここにはしなくも激論となった。僕はあくまでも信仰の上に立って頑として動かない。勿論その理由を説くが、兄は僕の心を知ってくれない。兄としては僕のために親切に熱心に忠言されるのであるが、それは信仰なき一般の弟に対すべきものであると思われる。僕の基礎はもっと深いところにあるのである。僕は失敗しようが、斃れようが、この信仰をすてることだけは出来ない。「僕から宗教をとりされば僕は死である」と叫んだ。キリスト・イエスの肖像がかかっている。兄上の肖像もかかっている室でのことである。僕は全く普段の僕でなかった。驚くべき力に溢れていた。ルッターが僕の中に居た。僕は兄、親切な兄に対してさえ、信仰の上では仇敵の如く論じた。とうとう母上の御仲裁でやめた。

母上と一寸散歩して、さらに僕の意をお話しした。母上はやさしきお言葉でさとされた。無理はおっしゃらなかった。母の愛をしみじみ感じた。しかし帰って寝るときは兄と和らいでいた。それは信仰のことに於て僕はゆずり得ないが、兄に対する弟の態度は忘れることが出来ないからであった。兄はよき兄である、親切な兄である、真面目な兄である。共に共に母上をお慰めすべき兄である。その兄に対して不遜でありたくはない。不和でありたくはない。それは出来ないことである。僕の良心がかく言う。ただ信仰は別である。

淳吉様の霊、安かれ。思うもいたましきことである。

○1925年9月27日（日）

晴。聖日。今朝、藤井先生のお宅訪問の前、本箱の本を見ていたら、はからずも自分自身を喜ばせんとして隠して置いた一封筒（10円）を発見して、ハッと思い、思わざる「たなからぼたもち」式の得物に喜んだ。喜んだのは初めの瞬間、10円紙幣を見てであったが、次の瞬間は、これを以て今日は良い書を買ってやろうということであった。平口様訪問、お留守。武田訪問、15分、叔母様、宣ちゃんとお話し、早速足を新町に向ける。武田から1時間にして藤井先生のお宅につく。時に10時15分、大方来て居られて、皆で13名、男の方6名、女の方7名であった。久しぶりの集会で（僕にとっては）実に有難くあった。はじめにお祈りをされた方は何と云う御名だか知らないけれども、実に熱烈で僕は然りアーメンを心のうちにとなえざるを得なかった。ことに、我等基督者の重任をよく憶えて聖戦をなさざるべからざる覚悟を告白したときは、本当に然り！と思った。ローマ書第8章の終りの方を読んだ。マタイ伝のキリストのバプテスマのお話は藤井先生によってなされた。Bescheidenheit〔謙虚〕を深く教えられた。結婚問題のことが出て、日本の婚礼の儀式的外形的を知らしめられ、基督者はそんなことは出来ないと思った。Ernst〔厳粛〕である。

丸善へ直ちに足を廻す。早速独乙語の「宗教と哲学の部」へ上って行く。Karl Holl〔カール・ホル〕の字が読まれたときにハッと思った。佐藤先生の「宗教と巡礼」によって独乙のルッター学者の一流の人、信仰の人なることを教えられていたからである。見れば、

Karl Holl, Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte, I. Luther,〔教会史論文集、第1巻、ルッター〕Verlag I.C.B Mohr <Paul Siebeck> Tübingen

とある。早速これを買うことにした。丁度また10円である。今朝の10円は正にこれを買わんがために神様から戴いた感がした。実に嬉しかった。本を買った経験でこれほどうれしかったことは未だかつてなかったと云ってもいいだろう。１９２３年にLutherのをDie Bibel〔聖書〕を彼のGeburtstag〔誕生日〕に買ったときも嬉しかったが、それ以上であるかもしれぬ。また丸善で、Uhland〔ウーラント〕のGedichte〔詩集〕を買った。Hiltyの Lesen und Reden〔読書と談話〕も買った。Homer (von Heinrich Voß)〔ハインリッヒ・ヴォスのホメロス〕も買った。丸善に居ること2時間、驚いた。Dürer〔デューラー〕、Rembrandt〔レンブラント〕、Raphael〔ラファエル〕等の絵が欲しくてたまらなかったが、Dürerの絵はこのクリスマスにどなたかからいただくことに独りできめて帰った。

帰りには青木へよって母上を伴って帰った。今日は淳吉様の告別式があったが僕は行かなかった。夜、7時55分の汽車で帰る。カバンは例の如く書で一杯であった。カルル・ホルのルッターを伴れて来た。感謝に溢れていた。車中、松濤、川端と一緒。松濤は今日神田の古本屋でヴィンデルバンドの「哲学史」を見つけたとホクホクもの、僕はカルル・ホルの「ルッター」を見つけたとホクホク。小さき宗教家と哲学者とは互いに、思わざる宝物を手にして喜びあった。あまりに不思議な二人の運命に互いに驚きもした。11時半帰着。

12時半就床。

〇１９２５年９月28日（月）

晴。今日は睡眠不足で一日ボヤボヤ、先生にも牛耳られて少なからず悲観した。名誉回復をなすべく、まず寝た。夜少しやって、はやく寝た。

〇１９２５年９月29日（火）

雨。今日は午後から雨。Karl Holl's Luther は昨日から読み始めたが、難解。なかなかもてあますが、面白い。とにかく、今日で４頁読んだ。全部で590頁、いつまでかかって読めるかしらないが、ヒルティーの読書法にしたがって着々とやるつもり。厚い本であればあるほど、意気を以てしなければならない。それだけ希望も大きいのである。大なる希望は苦しまなければ達せられないのである。

今日は色々と思わせられて、苦しい日であった。日記に書くにはあまりに大きく漠然としているからやめる。しかし結局、「恩寵と信仰」と思った。哲学、社会問題などが交々頭をなやましたのであった。人の生活を離れた宇宙観、それは結局何であるか。……色々言いたいが、時間がなくなった。勉強もすこし残っている。寝なければならないときも来る。

独乙語の講師菅藤先生は人格、劣なるものと今日は観た。

〇１９２５年９月30日（水）

雨。今日は終日雨。昨夜、佐藤繁彦先生にお手紙を書いたのを今朝投函した。一昨日は藤井先生へ書いた。何しろ、カルル・ホル教授（博士）のルッターを買ったのだから、嬉しくて先生方にお報せして喜んで戴かないわけには行かなかった。

さて、毎日2頁毎読むとして1年間かかる。それでよい。とにかくシッカリやる。今日は内村先生の書を暫くぶりで拝読して、先生の言われざる強き文章に打たれた。先生の文章はルッターの文章の力があり、深みがあるのと同じであろうと思う（勿論僕には独乙語のこの辺のことはわからぬが）。確かに日本文学の一改革であらねばならぬ。精神的、信仰的な力ある文章は先生の独壇であると思う。老先生は何と云っても日本基督教界のルッターで居られる。内村先生、藤井先生、畔上先生、佐藤先生、塚本先生、いつも数えるこの５大先生が僕の先生である。哲学を教わるにつれて益々確信に燃えて行く。哲学は敵ではないが、親しきものではない。松濤と一緒に帰るとき、二人の話題は常に哲学や宗教である。彼は電車に乗るべきところを、僕との話が面白くなると歩いてしまう。